

第27回九州地区国立大学間合宿共同授業報告書

<https://doi.org/10.15017/21753>

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 27, 2002. 九州大学大学教育研究センター
バージョン：
権利関係：



第 2 7 回 九州地区国立大学間合宿共同授業日程表

月日	時間	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23				
第 1 日目	8 月 23 日 (金)	車中オリエンテーション													集合時間	野外授業	移動時間	受付	開講式・オリエンテーション	夕食・交歓会	野外授業のレポート作成(自由討議を含む)(教職員打合せ)	自由時間 (学生世話人打合せ)	消灯就寝
		講義 B - 1		講義 B - 2		休憩	講義 A	朝食	起床	記念撮影		施設見学	学生フォーラム (1)	自由時間(教職員・学生世話人打合せ)	夕食	討議 1 (講義 A ~ B)	講義 A } B のレポート作成(自由討議を含む)		自由時間 (学生世話人打合せ)	消灯就寝			
第 2 日目	8 月 24 日 (土)	講義 C - 1		講義 C - 2		休憩	講義 D	朝食	起床	昼食	学生フォーラム (2)		学生フォーラムのレポート作成	自由時間(教職員・学生世話人打合せ)	夕食	討議 2 (講義 C ~ D)	講義 C } D のレポート作成(自由討議を含む)		登山指導	自由時間	消灯就寝		
		講義 C - 1		講義 C - 2		休憩	講義 D	朝食	起床	昼食	登山指導		自由時間	夕食	自由時間	懇親会		自由時間	消灯就寝				
第 3 日目	8 月 25 日 (日)	講義 C - 1		講義 C - 2		休憩	講義 D	朝食	起床	昼食	学生フォーラム (2)		学生フォーラムのレポート作成	自由時間(教職員・学生世話人打合せ)	夕食	討議 2 (講義 C ~ D)	講義 C } D のレポート作成(自由討議を含む)		登山指導	自由時間	消灯就寝		
		講義 C - 1		講義 C - 2		休憩	講義 D	朝食	起床	昼食	登山指導		自由時間	夕食	自由時間	懇親会		自由時間	消灯就寝				
第 4 日目	8 月 26 日 (月)	講義 C - 1		講義 C - 2		休憩	講義 D	朝食	起床	昼食	学生フォーラム (2)		学生フォーラムのレポート作成	自由時間(教職員・学生世話人打合せ)	夕食	自由時間	懇親会		自由時間	消灯就寝			
		講義 C - 1		講義 C - 2		休憩	講義 D	朝食	起床	昼食	登山指導		自由時間	夕食	自由時間	懇親会		自由時間	消灯就寝				
第 5 日目	8 月 27 日 (火)	講義 C - 1		講義 C - 2		休憩	講義 D	朝食	起床	昼食	学生フォーラム (2)		学生フォーラムのレポート作成	自由時間(教職員・学生世話人打合せ)	夕食	自由時間	懇親会		自由時間	消灯就寝			
		講義 C - 1		講義 C - 2		休憩	講義 D	朝食	起床	昼食	登山指導		自由時間	夕食	自由時間	懇親会		自由時間	消灯就寝				
月日	時間	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23				

1 メインテーマと趣旨

1. メインテーマ

「共生は可能か？」

2. 趣旨

共生の問題は、人類と自然との調和といった地球規模の問題であると同時に、日常のそこかしこに危機の兆しが顕れている生活者の問題でもある。

人類は他の生物種とは異なった存在であるという誤った観点から、他の生物種との類似性を見過ごして人工の世界を築いてきた。公害の発生、生物種の減少や絶滅、地球温暖化の進行など、人工の世界の限界に直面している現在、人類は、自然と調和し地球環境を保持していくことが、共生の問題の解決となると考えるようになった。地球生態系の一構成員として、他の生態系について新たな視点で学び直し、自然のメカニズムと同様にデリケートな自らを知ることは重要な課題である。

一方、日常生活における共生の問題は、互いの差異性を尊重し合うという新しい課題を投げかけている。国籍、民族、文化、宗教が違うことによって、それぞれの間観も世界観も異なっている。男性と女性、障害者と障害のない者、病者と健康者、高齢者と若者、都市生活者と農村生活者など、社会的営みにおける共生の実現は、差異といかに取り組むかという課題でもある。

「共生は可能か？」と問うことによって、21世紀の社会を展望するうえで、より精緻な眼差しが得られることを願っている。

2-1 学生フォーラムテーマと趣旨

1. テーマ

「共生を可能にする知恵とは？」

2. 趣旨

「共生は可能か？」と、メインテーマに疑問符が付いているのは、今、新たな知恵を産みだすにあたって、答えのない問いに答え合うという新たな学びのスタイルが重要となっているからです。

私たちは、隣人と共に生きることは可能なはずだと思ってきました。しかし、社会が高度化し複雑になってきた結果、隣人は自分が折り合いをつければ済む相手でも、あるいは正しく諭せば済む相手でもなくなりました。国際化、情報化、学際化の時代に、夢や希望を実現しようとするために、私たちには新たな知恵が求められています。共生をめぐる、「私に何ができるか？」と生活者として問うことから、「世界はどうあるべきか？」「自然環境をいかに守るか？」など地球的な規模で問うことまで、共生の目的について考察し、同時に、共生の実現を妨げているさまざまな問題を発見し、その解決を模索することは、学びに堪能であろうとしている者たちへの社会的要請です。

高校までの学びの大半は、すでに見出されている答えにたどり着くための解法を習得することに主眼が置かれてきました。しかし、日本や世界に目を向けると、共生が問われている出来事が枚挙にいとまもない程あります。それらの問題解決に取り組もうとする時、どんな立場にも文化にも宗教にも当てはまる唯一の答えがあるのだろうかという疑問に到達します。この時、学びの原点である「なぜ？」へと立ち戻らざるをえません。

共生の可能性をめぐるフォーラムでの対話は、参加者それぞれの答え探しにとって貴重なプロセスとなることでしょう。フォーラムを通して、参加者それぞれがたどりついた意見や考えは、共生の実現に向かうにあたって欠かすことのできない、ひとつひとつの知恵となることでしょう。

2-2 福岡教育大学（事前学習のフォーラムレポート）

高齢者との共生

21 世紀の超高齢社会を活力ある社会として維持するには、高齢者が生きがいを持って生活し、就労や余暇活動など社会参加できる環境を整備していかなければならない。また、私たち一人ひとりが高齢者を社会の負担としてみるのではなく、尊厳ある人間として扱い、共に生きようという意識と姿勢を持って、それを実現するために努力していかなければならない。

それでは、具体的にどうすればいいのか。その手がかりとして、私たちはバリアフリーの問題と高齢者の就労の問題について検討してみた。

まず、バリアフリーの問題について考えてみる。バリアフリーによって、高齢者は行動を制限されることがなくなり、行動範囲は格段に広がるだろう。その結果、高齢者の自立が促進されるだけでなく、その社会進出も今以上に活発になる。新設の建築物であれば、事前にバリアフリーを計画に盛り込むので、コスト的にも負担はさほど大きくはならない。しかし、ここで問題となるのは、既存施設の改造と、在宅介護が増加する中での住宅改造の問題である。前者はその数が膨大であり、事業者への負担が大きい。後者は被介護者の家族の大きな負担となる。確かに、現時点だけを捉えると、コストの増加や負担の増加となるのだが、将来的な国全体の介護コストの圧縮や、高齢者の社会参加による消費の増加などと合わせて考えていくと、話は違ってくる。例えば、「クロス・セクター・ベネフィット」という考え方によると、高齢者住宅を建設する場合、「①ひとつの住宅を高齢者仕様にする。②社会全体として、1995 年から 65 歳以上になる高齢者が順次、そうした高齢対応住宅に入居する。」という二つの条件を仮定し、建設コストと介護費用の算定を行った結果、①の場合、建設コストが 54 万円増額する一方で、将来的なコストは 284 万円減額した。②の場合は、社会全体で住宅整備コストが 8 兆 2000 億円増加する一方、介護コストは 19 兆 7000 億円減額され、建設コストのそれぞれ 5.2 倍、2.4 倍の介護コストの削減効果をもたらす計算になった。つまり、現時点での住宅改造費用の増加はあるが、その一方で、はるかに大きな割合で、将来的な施設建設費の抑制や、介護費の圧縮といった面でのコストが軽減されるのである。

次に、高齢者の就労について考えてみる。現在、日本の会社組織には定年退職制があり、社員は 55～65 歳で会社組織を去る。これは、年功序列と終身雇用に起因する制度である。会社側は、年功序列により年を経るごとにあがっていく労働者の賃金の負担を世代交代によって軽減し、新人採用による事業展開の活発化を図ることを念頭に置いている。しかしながら、多くの定年退職者は、「まだまだ働きたい」という熱意を持っている。

最近このギャップを埋める試みのひとつとして、退職者を新人の教育係や監督として再雇用する動きが、わずかではあるがみられるようになった。これによる再雇用者からは、「給料は安くなったが、重役としての重い責任から開放され、しかも働けるのでありがたい」という声がきかれる。この再雇用制度は、個々の高齢者に思い通り働ける環境を提供するのみならず、他に例を見ないほどのスピードで少子化が進行している日本の生産人口を増やすことにも貢献できる。2000 年現在、60 歳以上の労働者

は、全労働力人口 6,860 万人のうち、約 14.5 パーセントに当たる 995 万人である。この中には、65 歳以上の方も約 500 万人含まれている。今から8年後の 2010 年には、労働力人口 6,825 万人のうち、20.3 パーセントに当たる約 1,386 万人が 60 歳以上、そのうち 65 歳以上は 765 万人に上るという見通しが立っている。

このように高齢者の就労機会が増え、環境が整えば、高齢者の側も積極的に社会に出ていこうとする姿勢を持てると考えられる。しかし、意欲だけでは働けない。そこで、40 代頃からリカレント学習に取り組んでいく必要がある。リカレント学習とは、職業能力の更なる開発を目的として開講される授業のことである。中高年者がパソコンや英会話、経済、マナー、健康医学、文学にいたるまで、さまざまな授業を受け、常に新しい情報・知識を得て頭の柔軟性を保つように努めれば、高齢になってもその知識と積年の経験を十二分に活かし、意欲的に働けるようになるだろう。

高齢者との共生は、私たちがこのような可能性を理解し、それに向かって努力することによって実現するものである。教員を目指す私たちは、後続世代である子供たちにもこのようなことを教育しながら、高齢者が社会参加しやすい環境を整備していく努力を引き継いでいきたい。



九州地区国立大学 九重共同研修所

2-2 九州大学（事前学習のフォーラムレポート）

共生の形態と実践

九大では、共生に関して様々な意見が飛び交いました。「共生を可能にする知恵とは？」という議題について、共生を具体的に実現する方法として「他者を理解する」ということを否定する人は0でした。私たちはそこから議論を開始しました。多数の意見をまとめることは、少数派の抑圧にもなりかねません。九大では一人一人の生の意見をお伝えします。

●「共生を可能にする知恵とは？」というレポートからの各人の意見

まんさい 他文化と対等につきあう自分の文化の歴史をよく知ること＋他文化の歴史を良く知ること

きぬがさ 対立が終了したら、1つのプロジェクトを協働して、共生を取り戻す

たかた 違う人がいることが当たり前・つきあってければいい

なかさ 人類共通の倫理観を確立すること→共生へ

ひわたし 今までの意見は正しい→具体案は？開発者が低エネルギー型開発。

くわつる たかたさんの意見＋1つのルールをもつこと

きむら 相手の考えを知る＋相手が何を考えているのかを考えつつ生きるという

いずみ 他文化と交わらなくてよい→共生できているし、戦争しない

理解しなくてもいいし、仲悪くなったら距離おいて生きていけばいい

なかむら アメリカが爆弾を落とさなければいい

あららぎ 共生に関心持つこと＋同じ人間同士で違いを尊重しあって思いやりをもつ

つつみ 相手を理解すること＋相手の行為にたいして寛容になること

→実践＝自分と合いそうな相手とうまくやっていければいいし、合わない人とはかかわらなくていい分離型共生→共生して行きたいグループから共感者が集まって他グループの人々が募金等で協力して、とうまく実行にうつす

やまさき 相手のことを知ることが必要→知るためにはそれなりの知識・それを知るための教育が必要→識字率など最低限、同じ言葉を話すことのできる人を育てる

●以上の議論をふまえて、意見交換がありました。

なかさ アメリカだけを批判するのはおかしい

なかむら 爆弾は抽象的な話で、アメリカ（日本も）を代表する西洋文明の拡大の1ページ。山で暮らしているような人のところにでかけて行って、自文明に組み込もうとする。拡大化するグローバル社会を無理強いして、お互いを尊重しましょうという話？市場経済の拡大と自然から人間が離れていく状態の先鋒がアメリカ。⇔農村型共生

●そこで、レポートをどうまとめるか、という議論になりました。

くわつる ①世界全体の共生②共生できる人とだけの共生③完全に関わりを絶つ

→それを目指すにはどういう知恵があるか？

やまさき ①他者を理解する→理解しようとする方法は何があるか？

②分離

たかた 理解しようとする過程でぶつかって戦争になる→完全な理解は無理だからする方法はあるわけ？

なかむら 仲良くしようといってきた人をつっぱねることは普通しないので、初めから「相手を理解できない！」という態度は取らない方がいい。

たかた 自分から理解をしていくのは（例：イスラムの理解）私にはできない。

やまさき 共感と理解は違う。

つつみ 共感と理解では、共生の程度が違う。別の文化の人でも、一緒に暮らす共生⇔ある程度の距離をおいた共生（こちらなら自分もできる）

やまさき 共生しようとするには相手を理解しようとしなないといけない、という前提で話して。理解しようとするには何をすればいいか？前向きで具体的な議論を。

●他者は理解しなくていいと思う人…〇→理解しようとする方法について議論しました。

なかむら 理解しようとする姿勢を教育して、個人個人理解していけばいいのでは

たかた 理解しようとする対象が多すぎるので、白文化をまず見直すのが大事

きぬがさ 他文化に触れて、白文化を知るという手もあり

まんさい 他文化云々という大きい括りでなく、個人・アフリカの〇〇さんとして接する

なかさ 人類皆兄弟と思えるようになるような世界共通の本を作って、全世界の言語に翻訳して配る

ひわたし いかに自分が行動するか

くわつる 自分自身を見直し、それが他者との違いを発見する→ルール作る

きむら 日本人的な違うのを排除するのではなくて、違いを使う。同じなのを見るのではなくて、違いを見つけていく。

いずみ 経験を積んでいけばいい

あららぎ 国連など国際的話し合いの場をもって、お互い話し合うのが大事

つつみ 国の代表だけで話しても仕方ないので、民間に広めるためには世界共通の本を配ってそれに沿った教育を民間で進めていく

大切なのは結論ではなく、議論の過程であるという信念の下、レポートは以上のような形になりました。

2-2 九州芸術工科大学（事前学習のフォーラムレポート）

共生を可能にする知恵とは？

□某日 芸工大のとある場所にて…（合宿授業学生フォーラムにむけて）

やすし：「共生を可能にする知恵」って何やろ。

あゆみ：どんなもんやろかねえ。

たくや：そんな事わからないよね。プリント読んでても話がつかみにくいし。

あゆみ：ああっ、もうわからんっ。ちょっと休憩！

＝休憩中＝

あゆみ：うちの隣の人、うるさいよねえ。

やすし：御近所付き合いて、ややこしいわ。

たくや：でも、なかよくはしたいよね。

あゆみ：そういや、この前は「お騒がせしてます。ゴメンナサイ。」って言ってくれたんよ。あれは、うれしかったな。

たくや：あいさつだけでも、うれしいんだよね。

やすし：そや。御近所付き合いは、まず挨拶からやわ。

たけし：あのお、御近所付き合いて…、共生じゃ…ねえ…べか？

あゆみ／やすし／たくや：ああね。／あっ、ほんまや！／だあね。

たくや：そうか、共生って、遠い話じゃないんだ。普通の何気ない所でも「共生」があるんだ。

＝休憩おわり＝

やすし：共生って、みんなが一緒にいられるって事やんね。どうすればそうなるんやろ…

あゆみ：そもそも、共生ってどーゆーことなん？

やすし：共存とはちゃうんやろか。

あゆみ：ただ一緒におるんなら共存やし…

たくや：共生とは言えない、か…

やすし：じゃあ、なんやろか。

あゆみ：お互いがお互いを思いやりながら一緒におることが共生やと思う。

やすし：だったら「共生を可能にする知恵」つてのは…

あゆみ：芸工大（※）って「デザイン（設計）」の学校よね？「デザイン」が「共生」のためにできること、なんかあるかねえ。

ー 同：う～ん…

たくや：ユニバーサルデザイン…ってあったよね。

あゆみ：みんなが同じように使える物をつくるんやっけ？
たくや：そんな風にもものをつくるのがユニバーサルデザインか…
あゆみ：みんなが同じもん使えるようになったら、共生できるようになるかねえ？
やすし：ま、少なくとも共生の「手助け」にはなるわな。
たくや：じゃ、これを考えていこうか。
あゆみ：よし、じゃあ資料集めやね。

＝後日＝

あゆみ：こんなんあったよ。ほら、ここにユニバーサルデザインって。
たくや：「誰でも気持ち良く使えるようにあらかじめ都市や生活環境を計画する考え方」かあ…
やすし：あ、「物」じゃなくてもいいんや。人と人を結び付ける何かあらへんやろか…例えば…
たくや：テレフォンカードなんてどう？ココ、ココ。端っこが凹んでて、目の見えない人でも表裏とか入れる向きが分かるようになってる。
やすし：エレベーターもいいんちゃう？ 足悪い人もそうでない人にもラクやし…
あゆみ：あんさあ、あいさつって、どうなん？朝ひとこと「おはよう」つて言うだけで、ずぶん空気が和むやん？これ、共生の始まりやない？
たくや：人が集まる場所も、共生のきっかけをつくるよね。なんとなく足が向くっていうか、そこにいと心が落ち着くっていうか、人と人とのつながりを生む「場所」ってものもあるとおもう。
あゆみ：そうよね。そうなんやけど…、それもあるんやけど、どれもどうもピンとこん。
－ 同：う～ん…
たけし：あの… ところで… 何がひとつ、あるんでねえ。…べが？ わった（すごく）…身近にあるもんなん…だ…ばって…
－ 同：？？？
たけし：こ、これなん…だば…って…
－ 同：！！！！
たけし：このTシャツ、これ…誰が着てでもおがしくねえ…べさ？
たくや：ああ… 老若男女問わず、しかも世界中でいたい何処でも着られているし。
あゆみ：あ、これユニバーサルやん！
やすし：ほんまやん！
－ 同：それだあ。やられたあ。
やすし：たけし、お前いつも黙っとるけどたまにエエ事言うなあ！

※ 芸工大：本名、九州芸術工科大学。「技術の人間化」と、それによるモノづくりを考えるとこ。あくまで「人」の事を考えた技術を追求してます。

2-2 佐賀大学（事前学習のフォーラムレポート）

ヒトとヒト・ヒトと自然

テーマとして与えられた標記題目には広範囲のことが含まれる。そこで参加者の意識調査をするために、参加者全員（12名）に「共生」「循環」「ライフスタイル」をキーワードに原稿用紙一枚程度の問題提起を求めた。提出された意見は「民族・宗教問題」が4名、「環境問題」が3名、「地球温暖化（エネルギー）問題」が2名、「産業廃棄物問題」が2名、「福祉問題」が1名と多岐にわたり、また提出された意見も内容豊富なものが多く、参加者の関心の高さが窺えた。提出された問題提起をもとに「共生を可能にする知恵とは？」の議論を深めていく中で、テーマを絞ることの困難さに直面した。ここでは、個々の問題に対し「知恵」を求めた、結果について報告する。

前述した通り参加者の意見はさまざまである。WTCビル航空機突入事件、パレスチナ問題、循環共生型のライフスタイル、自然浄化法の利用、京都議定書。現在の社会情勢を反映する形であげられた。なかには、人類の歴史と廃棄物と題し過去の事例を挙げそれを見習うことはできないかという意見も出た。これらは「ヒトとヒト」「ヒトと自然」の二つに大別できる。私たちはこれらの問題提起に対してディスカッション形式で議論した。なかでも特に議論されたのが、「民族紛争・宗教戦争」の問題である。

昨年のニューヨークWTCビル航空機突入事件をきっかけに、民族、国家間の問題が以前にましてとりたてられるようになった。アフガニスタン情勢、カシミール問題、パレスチナ紛争、東ティモール独立問題、身近なところでは朝鮮半島情勢などさまざまである。

討論の中で「戦争の引き金となる対立（戦争などの破壊的・暴力的なもの）をなくすにはどうしたらよいか？」が議題となった。これに対し、

- ・「民族・宗教を越えた子供の頃からの交流」
- ・「多様な価値観の受け入れ」・・・相互理解
- ・「相互理解の精神を養う」
- ・「相互理解ができない部分に関しては深く干渉しない」
- ・「戦争の廃絶が必要」

などさまざまな意見がでたが、私たちが出した結論は、対立はなくなるということだ。むしろ対立も共生の一部であるという見解に達した。人、民族、国家間の共生のなかで、意見、文化、宗教、見解などの違いからどうしても対立が生まれてしまう。しかし対立は必要なものなのである。対立をなくすのではなく、その対立が殺人、紛争や戦争など悲惨な結果を招くものに発展しないよう未然に防ぐことが重要である。すべての人々が一つの考えにまとまったとき、その考えや行いが悪いことが善として進められてしまう。そうならないためには、悪を悪であると忠告する立場の人間が必要だ。また、お互いが対立することで競争心が生まれ、文化・経済などの向上にもつながる。そういったことから対立が必要であるといえる。ここであげる「対立」全てがではなく、個人の意見、アイデンティティーなど、お互いが主張するときにおきる衝突もあるということを付け加えておく。

一方、環境問題についての議論は比較的あっさりしたものだ。専門的な知識を必要とすることが原因の一つとして考えられる。事前に提出された原稿にも、「循環共生型のライフスタイル（パーマカ

ルチャー)」「自然浄化法」と具体例が挙げられ、現在行われている事例の紹介程度にとどまっている。討論でも、われわれが大掛かりにやらなくても、個人としてできる最大限のことをやるのが後々につながるという見解に達した。普段の生活の見直し(資源の無駄遣いをしていないか)をすることが、個人としてできる環境保護であり重要である。また、工場から出る汚水や煙などについては、ある意味他人任せの部分があると考えられる。私たちが、いくら工場に言い寄ったとしても、工場を運営する企業側が何の対策もとらなければ意味がないのだ。やはり、当事者であれ加害者であれ、一人一人が意識して環境保護に取り組んでいくことが必要不可欠であり、個人の意識向上が欠かせない。

最終的に私たちは、話し合いの場を設けることが重要であり、お互いが意見を述べ、お互いを理解しあうこと「相互理解」(個性を尊重すること)が共生への第一歩であり、問題解決とは行かないまでも、解決にむかうまで(総理解ができてそれに行き着くまで)のプロセスであるという見解に達した。また、話し合いをする前に、「正しい情報を知ること、知らせること、そして、得た情報をもとに行動に移すこと」が重要になってくる。また、情報を見分ける能力を身につけることが必要不可欠となる。

これらを可能にしていくためには、幼い頃からの教育(知性を養うための環境作り)が必要である。学校教育のような今も昔も同じことをやるのではなく、次の段階にすすめる教育が必要である。そして、個人それぞれの意識の向上が重要である。また、それぞれの問題解決には、時間の連続性、継続性を踏まえたうえで、その時々のできる解決策を考え長い目で見ていくことが重要である。



山の家

2-2 長崎大学（事前学習のフォーラムレポート）

自然と人間の共生を可能にする知恵とは？

自然との共生を考えるには、共生が成立していたといわれる昔と今とを比較し、共生が困難になった要因を考えなければならない。その要因として、人間中心主義・利潤至上主義・人口増大や人間の行動範囲・規模の拡張が挙げられ、これらに後押しされて、再生力の限界を超え、自然を利用したことが挙げられる。また、人間が科学技術という力を得たために、欲望に依存する暴走が始まったこと、更には、発展が止まると潰れてしまう社会構造との関連や、自然への影響に対する予測を怠ったことも要因と言えるだろう。

こうしてみると「人間の本能」「政治・経済」「快樂や便利さを追求した知識や科学技術」等が、共生を不可能にした背景にはあると言える。一般の人々も自然破壊が悪いとは分かっているものの、自然破壊が漠然としたものであるために実際どうしたら良いのか分からず、また、自分達にはあまり影響が及ばないので行動を起こそうとはしていない。

そこで、現代の社会を考慮した上で私達が提案するのは、「自然に対して謙虚な姿勢を示し、人間が自然の恵みを独り占めしないという考え方に立つこと」、「生態系の維持に努めること」、「持続可能な循環型の社会を創造すること」である。これらの提案は国境を越えて協力することによって実現させるべきである。それが、人々の意識改革を進ませ、自然との共生にも繋がるはずである。

以上の主張を踏まえた上で、昔の人の知恵と、人間中心主義を限りなく遠ざけるために相対化された第三者的な視点でもって、共生実現のための具体的な知恵を幾つか提示しようと思う。

一つ目の知恵として、自然の中で分解できないものの使用を止め、自然に還元できるものを開発・使用していこうというものがある。これは人間の生活を向上させる技術開発というより、自然に還元できるものの開発へと目的を変えることでもある。今まで使用してきた還元不可能な物質は他で代用し、再生技術や改良を加える形で実現が可能ではないかとも考えた。

二つ目の知恵とは、四季折々の自然を生かし、そのまま利用したり、燃料資源を無駄にしないために、風力・太陽光発電等のクリーンエネルギーを利用したりすることである。

これらのような知恵に加えて、精神論的な対応とシステム的な対応との融合を計ることが三つ目の知恵として挙げられる。例えば、「いただきます」「ごちそうさま」に象徴される「感謝の心」は大量生産・消費社会の中ではあまり意味を持たない、言わば「決まり文句」としてしか残されていない。だからといって「感謝の心」を持つようになっても、社会システムが自然に歩み寄りなければ共生は難しいだろうし、逆に、社会システムが循環型でも、そこに「感謝の心」がなければ本当の共生とは呼べないだろう。だから、人の共生を計ろうとする気持ちと社会システムの融合が必要だ（昔の人は感謝の心を持ち、全て無駄なく使っていた。最後まで使い切ろうとするから循環も、延いては共生も成立っていたのではないだろうか）。

どのようにしてその融合を実現していくのかということ、製品を作る資源等が有限であるということ（感謝の心）を伝えることと並行し、循環型のシステムを確立することが必要だと考える。また固定観念が定着していない子供達に対して、教育面での取り組みをすることも重要である。ただ、自然絶対主義やディープエコロジーなどの固定観念を生じる危険性も考慮しておかなければならない。

他にも、世界人口の 4.6%に過ぎないアメリカが世界の産出資源の 25%を消費している現状から、地域の偏りを無くすことも挙げられる。また、前述の例を地球温暖化防止会議で採択された京都議定書のように国々が互いに協力することや、国境を越えた民間同士が参加できるようなイベントで乗り切っ
て行こうとすること、これも第四の知恵だと考えられる。

長崎大学では、議論を重ねることで、以上のような内容を進展させた。私達全ての意見・考えを反映させるために、ここではあえて統一した答え（知恵）は出していない。なぜなら、意見・考え方が多少異なるが、皆が議論を重ねた上で互いの考え方に対し、理解を示したものであり、これら全てが自然と共生するための知恵だと考えたからである。



研修棟



宿泊棟

2-2 琉球大学（事前学習のフォーラムレポート）

多様化する社会での共生について

情報技術の発達や移動手段の進歩によって国家間の距離は急速に狭まり、世界はボーダーレス化に向かっている。一つの国家の中に様々な文化が同時に存在するのが当たり前となった今日、人間が社会生活を営む上で異なる文化に触れずにいることはもはや不可能に近い。

我が国においても、日本国民で1%にすぎないマイノリティーとしてのアイヌ人や在日韓国人などの問題を抱えているが、近年沖縄ではアメラジアン問題という新たな問題が生まれている。

アメラジアンとはアメリカ人とアジア人の間に生まれた子供を表す言葉である。アメラジアンと呼ばれる子供たちは、日本以外にも韓国、フィリピン、ベトナム等に多数存在している。沖縄の場合、米軍人または軍属の人と日本人女性の間にも生まれるケースが多く、広大な在沖米軍基地を抱える沖縄では基地と切り離すことの出来ない問題であるといえよう。

アメラジアンは、突然出てきた問題ではなく、第2次大戦後沖縄に起こるべくして起こった問題である。しかし、我々は長い間その問題から目をそらし続けてきた。その背景には米軍統治かの暗い影があっただろうし、もちろんアメラジアンが泣き寝入りをする事もあったであろう。しかし、最近になり変化が現れ、アメラジアンは能動的に声を発するようになった。それにより、アメラジアンの問題点などが、認知されるようになってきた。

アメラジアンの問題点としては、

1. 国籍・アイデンティティーの確立
2. いじめの問題
3. 差別意識
4. 教育体制の不備
5. 日本語適応の問題
6. アメラジアンの子供を抱える家庭の多くが母子家庭で低所得等である。

アメラジアンは、法律の不備等の問題により、最近まで日本とアメリカどちらの国籍も得ることのできない無国籍状態になることも多かった。現在では法律の改正等により無国籍状態となることは少なくなってきたが、二重国籍になったり、アメリカか日本かどちらかの国籍を選択することを迫られたり、今も国籍自体に不安定感がつきまとう状態が続いている。この事により自分の存在に疑問を感じ、二つの文化を共有しうる存在であるはずのアメラジアンが、現実として二つの文化の間で自己のアイデンティティーの確立すらままならないというケースが多々ある。

沖縄では、もともと「ムラ」という小さな共同体における結束が強く、そこから、排他的な差別意識が生まれ、それは現在でも残っている。沖縄内部でも、本島と先島諸島や離島では、異なる習慣を持つ場合もあり、お互いを異なる存在として捕らえている。差別に陥りやすい性質に、在沖米軍基地や歴史的事情からの反米感情が加わることで、アメラジアンは差別の対象とされやすい。さらに、沖縄戦の終戦記念日である慰霊の日や、在沖米軍人による犯罪の発生が、アメラジアン自身へのプレッシャーとな

りうる。

これは、アメラジアンの子供たちが、日本の公立校に通いづらいう原因になっている。とはいえ、アメリカンスクールは、授業料が高額であり、そこでも、いじめや差別がないとは言えない。アメラジアンを抱える家庭の多くは低所得である。低所得は教育問題に大きく関わってくるので、教育の機会を平等に与えるという意味からも、安い授業料で、アメラジアンらしさを生かし、日本とアメリカの両方の文化や習慣に触れることのできるスクールの設置が望まれていた。そして、1998年沖縄では、日本とアメリカの両方の文化の習得を目指して、「ダブルの教育」という理念の下に、アメラジアンの子供を持つ母親達が活動の中心となりアメラジアンのためのスクールが設立された。韓国にある、アメラジアンスクール「アメラジアン・クリスチャン・アカデミー」との交流も進めていく予定になっている。

行政側からのアプローチとしては、1999年アメラジアンスクールのある宜野湾市の教育委員会が、スクールへ通う子供達の在籍校での、「出席扱い」を認めた。これにより、日本の中学の卒業資格を得られるようになり、日本の公立高校への進学も可能になった。現在までに、三人のスクール卒業生が、日本の公立高校への進学を果たしている。

在日韓国人や朝鮮人に比べ、比較的新しい立場として認識されるアメラジアンについて目を向ける人は少なく、全国的にみて認知度も低い。彼等を取り巻く状況は、未だ万全とは言えない。今後も行政の積極的な対応や、民間からの更なる支援が求められる。二つの文化を合わせ持つアメラジアン本来の生き方は、それ自体が沖縄ひいては社会全体に向けた共生へのメッセージと言えないだろうか。



小松地獄

地熱発電所



2-3 学生フォーラムの感想（抜粋）

<福岡教育大学>

まだ合宿授業は終わっていないけど、今回この授業に参加して本当に良かったとフォーラムが終わった今思う。まず班別フォーラムでは、一人一人どういった共生を考えているのか発言していったのだが、人と人の共生、人と環境との共生、身近な事から世界に共通して言える事、本当に様々な意見が聞けたと思う。具体的には、九州には多いと思われる部落差別の問題や、沖縄の米軍基地、また米軍の人とアジアの人の間に生まれた子、アメリカンと呼ばれる子供達の差別、諫早湾の干拓事業でムツゴロウがたくさん死んだ事、高齢者や障害者を持つ人などに限らず誰もが同じように使えるようにというユニバーサルデザインの話など、聞いた事がなかったり、あまり深く考えた事のない事例もあった。住んでいる場所や育ってきた環境、今まで考えてきたこと、みんな違うから物事を見ている場所立場が違うのだなと実感した。共生という一つの事を真剣に考えて、一つどころか一人の人からいくつもの共生が生まれてくる。そういう事を知るのも、共生の第一歩かなと少し思った。全体のフォーラムでは班別の上をいく驚きと感動と感心と、とにかく色々な事を考えさせられた。発言の下積みになっている知識量が、みんな信じられないくらい多くて、私も一生懸命、前期の授業で聞いた話を思い出したりしていたのだが、明確に思い出せず、自分の今までの学ぼうとする姿勢を反省した。私は、全て（といっても自分でもよく範囲がわかりませんが）教育から始まると思っているし、教育が変われば何か変えられると思っている、その気持ちは変わらないけれど、話の中で違う角度から考える事、自分の専門、知りたい事だけを知るのではなく、本当に多分野にわたって知識を得ることも大事だと思った。知ることによって、それをきっかけに考える事ができる。ひょっとしてそれが共生の一番のポイントではないかなと思った。

<九州大学>

司会として何も意見が出ない空白の時間を恐れたが、それは全くの杞憂に終わった。合宿前、学校内での議論の蓄積と合宿での交流により、気軽でかつ個人個人の意見が飛び出して、1つの流れ・話題に終始しない議論ができた。ルールとして教員の発言はナシとしたが、高齢者、40・50代の就労の話題の時に飛び入りで職員の方に発言願ったが、その方が一生懸命話して下さったのが面白かった。このフランクで人の話をしっかりと聞いて答えようとする場の雰囲気こそ、とても貴重だと思った。

意外な程開発への関心が高く、その方向へ学びを進めている人がいる、という点に感動した。また何らかの交流が続けられれば良いと思った。

<九州芸術工科大学>

3時間少ししかなかったが、休憩なしにもっと続けたかったと思う。今日のこの学生フォーラムはどの教官の講義よりも刺激的であり、記憶に残るものであることは間違いない！ 大学に来て、同じ建築を志すもの同志で話し合ったり、また他学科の学生（といっても全員芸術系の理系）と話をしても面白かったし、刺激があったことは間違いない。しかし、それぞれ別々の地域に住み、興味、専門も違うもの同志が、今回のような広範囲な題材について話し合うことのオドロキと感動は格段に違うものであった。完全に予習以上でした。1回も話さなかった人がいたのは残念だったが、思いもよらない意見や言葉ばかりで興奮しっぱなしであった。福教大の人達は教育・福祉の立場から、琉球大の経済学部の人達は経済学的な見解から、農学部の人達は共生に対する専門・技術的な見解から、などなど。こうも日

常考えていることが違うもの同志だとフォーラムに広がりができるのか！ しかしまだ同時に、議論を進行することの難しさも感じました。まずは、テーマに沿って話を進行することが挙げられます。今回は、特にそこにこだわる必要はなかったが、やはりそれぞれ視点が違うとそれぞれの方向に話がそれやすいこと。次に、一言も発言していない人が大半だったということ。前者に関しては、その問題を抱えたまま議論が進行し、少し内容が偏ってしまったが、逆に良かったと思います。後者の方は、もっと話したい人に発言をうながす方法を考えるのが今後の課題としました。やはり、せっかくこの九重に集まって、自分とは全く違い、少しでも理解しあうあるいはただ意見交換できる可能性がある人が目の前にいながらコミュニケーションをとれないことはとても残念でした。そういった場合には共生は成り立っていないが、成立させようとして、そして仮に無理矢理皆が参加した状態になったとしても、それは共生といえるのか。本目的を達成することの支障となるのではないか、それは共生といえるのであろうか。また新たな疑問がわきました。最終フォーラムを楽しみにしています。

<佐賀大学>

「共生を可能にする知恵とは」というタイトルに、まず自分がどういうことを考えなければならないのかを考えた。今回、フォーラムでさまざまな意見が出たが、その分野があまりにも広すぎたので、うまくまとまらなかった。福岡教育大学の高齢者との共生の話で、退職した後、どこにその人たちを行かせるのかを言っていたが、私からみた日本はその制度が、きっちりあることを高速道路料金所で働いているおじさんたちを見てわかった。韓国では日本と違って高速道路料金所で働いている人は20代~25代の女性であることだ。力を要求する仕事ではないのに……（言うことが、なくなった）もちろん、退職を準備して次の仕事を見つけるための教育も大事だとは思いますが、それより政府からの正しい政策が必要だと思う。そして、佐賀大、長崎大学からの自然と人間、人と自然、というテーマで、自分は今年世界のあちこちで起こった異常現象から人と自然との間にいったい何が起こったのかを考えた。

先進国は、生活を豊かにし、もっとも便利な生活を望んだためいろいろなものを作りだしたり、アフリカやコロンビアなどの国から大量の木を輸入したり、自然が残っているところをゴルフ場にしたりした。そこから出てきた問題は、洪水とゴルフ場の周りに農薬を散布しすぎたあまり蛇の色が黒くなってしまったことだ。これだけではなく、他にも例はたくさんあるが、私たちはこういうことについて責任はもちろん、恥ずかしさを感じなくなってしまった。人間が自然とともにいることがどんなに大事なことを知らず、ただ経済力、未来向きの考え方、意識改革などばかり強調するのはいけないと思う。

<長崎大学>

昨日今日とフォーラムを通して、いろんな大学のいろんな学部の人のお話が聞いてよかった。私は1年生で、あまり専門的な発言はできなかったけど、2、3年生ともなるとかなり自分の専門を生かした発言ができていたので、これからの自分の大学での勉強にやる気もでてきた。また、1つのトピックでも、それぞれとらえ方や考え方が違うので、おもしろいなあとと思いながら話を聞いていた。時々、自分は絶対正しいみたいな発言をする人がいたので、イライラした。でも、自分には反論できるほどの知識がなかったので、反論もできず、くやしかった。

私は共生するためには、地球にイイことをしましょうとか、そういうキレイゴトを並べるよりも、誰かが言ったみたいに、技術をさらに開発させて、今の状況を打破していくという前向きな姿勢の方が現実的な気がする。長大は、自然と人間の共生についてのレポートを出したけど、私は完全な共生は無理だと思った。木を切るな、とか切り開いた山を元に戻せとかやっても、あんまり効果的じゃないけど、佐賀大の人が言っていたアイス・プラントとかの研究を進めれば、もっと違うアプローチで共生も可能

になっていくんじゃないかなと思った。大変有意義なフォーラムだった。

<琉球大学>

このフォーラムが、今回の合宿のメインとっていたので、自分なりの考えを発表できればと考えていました。結構、発言させて貰えたので、その点は良かったのですが、もっと別の分野からの意見の広がり欲しかったです。期待が大きかったので少々残念です。

私は、思想、精神論よりも、制度や手段の方が議論が深くなると考えていたので、そちらの方に偏りが出たかもしれません。ただ、「共生」を「先進国が後進国を犠牲にしているから駄目」とかいう、マルクス主義的二極構造の論調は、発展性に欠けるということを主張したかったので、その点は一応伝えられたように思います。

全体的に見て、発言者が同じような印象を受けたので、せっかくの機会なのにもったいない気もしました。議論を普段の授業で行わない人こそ、参加して欲しかったなと思いました。

内容だけでなく「話し合った」という経験を、今後に役立てていきたいと考えました。

3-1 野外授業

草原の草資源とその畜産利用：畜産における共生とは？

後藤 貴文 九州大学大学院農学研究院
(農学部附属農場高原農業実験実習場)
助教授(農業生産生態学)

畜産における“共生”を考えると、ヒトのわがままさが浮き彫りになる。確かに畜産農家ではヒトも家畜も共に生活しているので低次の意味の共生はしている。はたしてヒトと家畜の高次の共生はできるのか？ 家畜とは“その繁殖が人間の管理下にあるもの”と一般に定義されている。このこと自体、もはや共生ということばを否定しているようにも思われる。もともとの“共生”に対する定義が問題となる。我々は人間に必要なタンパク質を得るために家畜を支配下におき、制御しやすい家畜のみを育種選抜してきた。家畜と人間が共に暮らしはじめた頃は必要な分だけの最小限の家畜を養い、自給自足を基盤として農業の営みの中に人間、家畜および自然の共生というようなものが成り立っていたように思う。しかし、今や、産業としての農業、特に畜産業はその生産性を追及する余り、もっぱら家畜を経済動物として扱い、余りにも合理的な経営に陥っている。その代償として昨年、ついに BSE が発生した。現在の日本の畜産は共生を考える前に、深刻な問題を抱えている。



図1. 九州大学農学部附属農場高原農業実験実習場
(大分県直入郡久住町、背後に久住山がそびえる)



図2. 当実習場より阿蘇方面をながめた風景

日本ではとても信じられないことだが、現在、一部の発展途上国では毎秒ごとにヒトが餓死している。これは遠く離れた異国の出来事ではなく、日本のように人口が多く、食料の多くを輸入に頼っている先進国が世界の天候不良や種々の環境変化の原因による農作物不作により食料の輸入を拡大すれば、そのしわ寄せは発展途上国が担うこととなり、餓死者はますます増大することになる。ただ、日本がよければよいのか。このような考え方は地球の食料バランスを崩し、ある意味で発展途上国に大きな負担を強いる可能性があることを認識しなければならない。BSE の流入等の問題だけでなく日本の食料はできるだけ国内で生産する方向にシフトしなければならない。日本の食料自給率の低さ(35%)の原因の一つは家畜の餌となる飼料作物を90%以上、輸入に頼っていることにある。人が

食べるべき莫大な量の穀物が家畜の飼料として使用されている。このような飼養は、霜降り牛肉を生産する反面、無駄な脂肪を牛体に蓄積させるばかりで、牛本来の“草（繊維性の高い通常の動物では消化できない植物多糖資源）からのタンパク質を生産する”という従来、反芻類家畜が担ってきた自然物質循環における機能を全く発揮していない。それどころか“外国からの輸入飼料の大量給与により莫大な量の糞尿を生み出し、土壌の地下水の汚染”というわが国の環境破壊のゆゆしき問題の一つにもなっている。その上、牛舎内に過密な状態で集約的に不健康に飼養されているのが現状である。次世代のためにも早急にシフトする必要がある。

当九州大学農学部附属農場では高原農業実験実習場では、一般に難しいと思われる草資源による良質で安全な牛肉生産を目指す戦略として初期成長期の代謝的インプリンテング効果、すなわち幼少期の飼養環境を制御して産肉性に優れた体質作りを施して、そのようなウシを荒廃地に導入し、未利用草資源をうまく利用した物質循環型の良質肉生産システム構築の可能性を検討している。具体的にはどうということかという、とにかく草資源を使って牛肉生産をやろうというのが、第一義である。草資源による良質で安全な牛肉生産は一般に難しいと考えられている。それは反芻類家畜の栄養摂取機構ではルーメンでの粗飼料に含まれる繊維性植物多糖の微生物による分解に時間を要するため濃厚飼料多給に比べ栄養吸収が緩慢で飼料効率が悪く、現在の牛肉市場あるいは経営的に見合う時期にウシを出荷するためには発育が遅すぎるためである。近年、ヒトやラットでは遺伝だけでなく肥満や動脈硬化症等の体質は幼少期の栄養環境が大きく影響していると報告されている。生後直後における脳の発達過程には低次だけでなく高次の生理機能についての感受性期というものがあり、この時期に脳にどのような入力があったかによって、その機能がどういう方向に発育していくのかが決定される。幼少期の急速に機能が発達する時期が感受性期である場合が多く、各器官のこの時期に入力された様々な刺激の程度により総合的な機能レベルが規定され、いわゆる“体質”が形成される。同様のことが骨格筋についても言える。我々は幼少期の栄養環境の制御によりその後の代謝生理機能までもが制御されていくような効果を代謝生理的刷り込み（インプリンテング）効果と呼ぶ。このような効果がウシでも可能であれば、草による環境保全型の安全で効率的な牛肉生産システムに利用できるはずである。我々は良質肉生産に優れた遺伝的素質を持つ和牛の初期成長期に、代謝生理的インプリンテング効果により肥満体質をつくり上げ、そのようなウシを草資源で飼養すると従来よりも早く良質肉の生産が可能となるのではないかと考えた。そのような体質のウシを荒廃している農地に放牧し、そこで牛肉生産をするだけでなく、いつでもそのような荒廃地を農地に戻せるように保全しておこうというものだ。

我々はすでに大分県国東半島の放棄された荒廃したミカン園跡地で牛の放牧実験を行い、予備データを収集している。現在の牛舎を用いた通常の和牛飼養であれば9m³に2～3頭のウシを飼うが、荒廃地には1年中放牧することを考えて1ヘクタールに1頭の割合で放牧してある。荒廃していた土地にウシが入りそこにあらたな自然環境、生態系が成立し、大きな意味での“ヒト、家畜および自然

との共生関係”が生まれることを願う。皮肉なことに、ヒトがどこまで手を出さずに畜産が営めるか、どれだけ消極的になれるかが、畜産における共生に近づく道なのかもしれない。我々は最新の理論とテクニックを駆使はするけれども、どれだけ最低限の管理で畜産を営み、家畜と自然が織り成す共生の中で、日本の環境保全型畜産を構築できるのかを追求する。このような研究に賛同する学生諸君が現れることを期待している。

3-2 講義A

ホモ・サピエンスは滅びゆく存在か？ —環境・資源・エネルギーと現代社会—

上江田 一雄（長崎大学環境科学部教授：化学）

《講義要旨》

私たちは有史以来、自然を利用しあるいは自然から資源を採取して自然環境に負荷を与えながら文明社会を築いてきた。

古代文明は牧畜・農耕による計画的な食糧生産を可能とし、人類は日々の餓えから開放された。ところで、文明は、自然の恵みを利用するうえで、常に自然に対して影響を与えている。その影響が一定の限度を超えて自然環境を損なうときには、それが一因となって文明の基盤が失われ、文明の衰退に至ることになる。古代文明の衰退はこのことをよく物語っている。シュメール文明は、大規模な灌漑や森林の伐採の結果、食糧の生産が激減し滅亡するに至った。さらに、ローマ文明は、大都市化と、その建築資材および暖房や工業生産のためのエネルギー源として木材が大量に利用され、その供給のために森林は減少し、一方では、農村の疲弊による食糧の生産力が低下し、社会的混乱が加速して崩壊したと考えられる。

近代ヨーロッパ文明は家畜の力の代わりに蒸気機関を利用できるようになり、薪から石炭へのエネルギー転換は文明の流れを大きく変え、産業革命をもたらし、鉄の時代になった。また、科学・技術の進歩も著しく、工業によって生活に必要なものを安価に人々に供給できる手段が追究されていった。一方、交通手段の発達によって人間の活動範囲は飛躍的に広がった。ヨーロッパでの資源の不足や自然環境の限界は、植民地政策によって世界中からエネルギー源と天然資源を大量に確保し利用することによって乗り越え、その文明を発展させていった。この文明は貨幣を軸にした市場での価値を求める性格を持ち、その中で物質の生産量は増大の一途をたどった。また、文明の維持発展には大量のエネルギーを必要とし、多くの汚染物質や不用物を排出し続けてきた。

近代ヨーロッパ文明を引き継いだ現代文明は、地球のほぼ全域に拡大した。ある物質の需要が飽和してくると、次に新しい物質を開発し産業を支えるといった大量生産とともに多様化が進んだ。機能の高度化の名のもとに毎年のように新商品が生まれ、製品の寿命が短く、本来の耐用年数を経ずして、製品が破棄され、使い捨ての文明を生み出した。その結果、地球資源の大量消費に拍車がかかり、一方では自然界には存在しなかった新しい物質が大量に生産されて、これを自然界に大量廃棄することになった。現代文明の特色は、大量生産・大量消費・大量廃棄の社会活動や生活様式が広まって、自然環境への負荷が極めて大きいこと、世界各地の経済規模が拡大していること、および経済社会活動が地球全体の環境に影響を及ぼす規模にまで拡大し続けていることである。

人類は、地球上の生物が長年かかって築き上げた環境から多くの資源とエネルギーを得て、それを消費することによって繁栄してきた。一方で資源とエネルギーの使用は物質循環の流れを変え、地球環境へ大きな影響を与えることになった。

以上が現在に至るまでの記述である。将来、人類は破滅するのだろうか、それとも知恵を出し合って生存可能な地球にしていくのだろうか。あなたならどのようなシナリオを書きますか？

《学生レポート》

客観性を期するためには全員のレポート全文を紹介する必要があるが、紙数の都合で各レポートから数行を引用した。我田引水にならないように心掛けたつもりだ。なお、明らかに誤字・脱字と思われるところを除いては、原文を忠実に再現した。

- ・ バクテリアは絶滅せず、進化しなかったものと進化したものの全てが今でも共生している、という事実は人間社会でも知恵として生かせないものかなあと思った。
- ・ 地球環境問題の相互関係の図も興味深かった。このような図は初めて見た。今までこういう風に環境問題を関連づけて考えたことがなかったので、すごく新鮮だった。
- ・ これまで、科学は発展をとげてきたが、後戻りはすることができない。だから私は、この問題を科学の発達によって改善の策を探っていく必要があると思う。
- ・ 先のことをいろいろ推測し、計算してプラス方向にもっていくにはどうしていけばいいのか、そこについての先生なりの考えをもうちょっと聞いてみたかった。
- ・ 問題を解決するための技術開発につながるのだと考えると、技術の勉強だけでなく、経済や社会の状況についても関心を持ち、常に新しい情報入手するように心がけなければと思いました。
- ・ 地球の歴史を1年のカレンダーにたとえて紹介されたのが印象的だった。そのカレンダーによるとヒトが誕生したのは、12月31日の23時55分ということだった。このわずかな時間の間で、ヒトは生物の頂点に立ち、地球環境に対して様々な影響を及ぼしている。
- ・ ホモ・サピエンスは滅亡しないといいました。しかし決して具体的な対策があるわけでもなく結果はどうなるかわかりません。でもやらなきゃ、とにかく行動を起こさなければ分からないのです。
- ・ 今回配付された資料を見て、人間の手によって、地球にかつてないほど急激な変化が起こっていることがよく分かった。
- ・ 今こそ地球における環境、資源、エネルギーの問題についてふかく考えて地球に優しい、物づくり、あるいは生物と共存できることを考えなければならない。
- ・ 危機を乗り越えるためには一つの国家、一人の個人ではできるものではなく、ここでも『共生の思想』がでてくる。即ち世代・国家など枠を越えた共生が必要である。
- ・ 自分達のために、自分達が行った行為が自分達の未来をくもらせていることを現実を通して知るべきなのではないかと感じた。
- ・ 人間は他の動物と違い、考えて先を見こし、工夫し努力することができる。確かに、その力が環境破壊を招いた一原因だが、逆に、その叡知をもってすれば、この過去も正すことができるのではと期待すると同時に、私も、今後、自分でできることから取り組んでいきたいです。
- ・ 人は地球から搾取しているだけで地球にたいしてなにもしていない。これでは共生ではなく寄生ではないだろうか。人が地球に出来ることを考えて見ることも重要だろう。
- ・ 人と自然、人と人のように共生するためには相手を理解し、尊重することが大事だと思いました。
- ・ 資源がなくなったとき人間は他のエネルギーを利用して生きていけるのか、やはりいつかは滅びてしまうのか考えてもわからない。しかし他のエネルギーを利用する知恵を探していくしかないと思う。
- ・ まだまだ人と自然との共生が抱える問題は大きく重くのしかかっているが、この合宿中だけではとうてい考えられないので、これからも考え続けていきたい。

- ・ もっと地球を思いやって普段から行動することが何よりも大事な事だと心から思った。
- ・ 私に今できることとして、世界の環境汚染と各地の対応についてさらに詳しく知り、今後、日本がどのような方法を取るべきか考えてみようと思っています。
- ・ 現状をきちんと見つめ、これから自然とどのように共に生きていくかを考え行動する必要がある。その行動が一人一人にできる小さなことでも、それは共生するための第一歩であり、大切なことではないだろうか。
- ・ 先進諸国は先進諸国なりの技術による貢献をしていく必要があるように思われる。もちろん、無駄な消費を抑えることも同じく必要である。
- ・ 地球の歴史を1年においたとすると、わずか1秒にも満たない時間で資源の大量消費は地球にとってまさに衝撃そのものなのではないだろうか。
- ・ 快適に暮らすというのもまた共生ではあるけれども、様々な問題に直面する今は、ミトコンドリアから学んで生きるという事を考えた共生の知恵をみつけないといけないと思う。
- ・ “世代間の共生”という事で環境の保全を問題にするのはあまりなかったもので、考えさせられる事だと感じました。
- ・ 「人が考える葦」であるというのなら、よりよい共生のかたちを考え、それを実現できるのではないだろうか。
- ・ 人間は長い年月をかけ考える脳を育ててきたのだから、環境資源に対しても真剣に取り組む必要がある。
- ・ 共生は難しいのかもしれませんが、そうやって共生を考えていかないとヒトも他の動物も地球も滅んでしまうかとも思います。
- ・ そんなうすっぺらな時間で、これまでに築かれてきた地球をどんどん破壊していっている人間は一体、何様なんだろう。

レジュメ（覚書）

（1）地球のカレンダー

ヒトは新参者

Homo sapiens：（知性人・叡知人の意）現生人類の動物学上の学名。（『広辞苑』第3版）

（2）環境・資源・エネルギーの現状

- ① 地球環境の変化
- ② 地球環境問題の相互関係
- ③ 世界人口の推移
- ④ 人類とエネルギー利用の歴史
- ⑤ 主要な資源の埋蔵量、生産量と可採年数
- ⑥ 石炭・原油・天然ガス・ウラン埋蔵量
- ⑦ 二酸化炭素排出量
- ⑧ 世界主要都市の大気汚染状況

（3）エネルギー需要見通し

- ① 世界のエネルギー需要見通し
- ② 世界のエネルギー需要の地域別伸び

(4) 今世紀に直面するであろう環境・資源・エネルギー危機

- ・エネルギー供給危機
- ・金属資源供給危機
- ・食糧供給危機
- ・水供給危機
- ・二酸化炭素排出限界
- ・廃棄物排出限界
- ・環境汚染物質排出限界

(5) 危機を乗り越えるには

① 人間が地球上に生存しうるための最低限の条件

暑さ寒さや雨露を凌ぐことができ、健康を保つために必要な食糧が得られ、人間の尊厳が冒されず、そして冒さず、あらゆる生物と共存できること。

② 共生の思想

- ・世代間の共生
- ・生態系との共生
- ・国家間の共生
- ・国内における共生（地域間の共生、業種間の共生）

③ ホモ・サピエンスとして生きよう

④ 考える葦 パスカル（1623～1662）『パンセ』

「人間はひとくきの葦にすぎない。自然の中で最も弱いものである。だが、それは考える葦である。彼をおしつぶすために、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分である。だが、たとえ宇宙が彼を押しつぶしても、人間は彼を殺すものよりも尊いだろう。なぜなら、彼は自分が死ぬことと、宇宙の自分に対する優勢を知っているからである。宇宙は何も知らない。だから、われわれの尊厳のすべては考えることの中にある。」

3-3 講義B1

環境に優しい潤滑油

大野 信義（佐賀大学理工学部機械システム工学科教授：トライボロジー）

《講義要旨》

科学技術の発達と、それに伴う経済活動の進展は、人々の生活水準を飛躍的に向上させた。しかしその一方で、工場や自動車等からの排出ガス（二酸化炭素、メタン）による地球温暖化現象など地球規模の環境破壊を引き起こしつつある。現在、地球温暖化をもたらす二酸化炭素の排出削減をめざして、自動車メーカー各社が鎬を削っている。自動車から出る二酸化炭素量は燃費と比例しており、燃費向上が二酸化炭素削減の近道であり、そのために「ハイブリッド」「直噴エンジン」「無段変速機（CVT）」が注目されている。

さて、摩擦と摩耗を制御するために、人類は有史以来潤滑油を使用してきた。近年にいたっても、工業の発展は、新しい潤滑技術の開発の上にはじめて花開くことができたといっても過言ではない。分子設計による自動車用CVTオイルの開発がその例である。

本講では、まず「潤滑は何故必要か」を平易に解説し、次に自動車用CVTの開発を通して「不可能を可能」にした開発のキーテクノロジーであるCVTオイルの開発過程を紹介し、最後に「生分解性潤滑油（植物油）」についても言及する。



佐賀大学学生

スケートなど、物と物が直接接触あうのに、摩擦が弱く、滑りやすい。私は、今までそれがあたりまえだと、なんとなく思っていて過ごしていたけれど、金属と氷がなぜ滑りやすいかちゃんと理由があるなんて考えたこともなかった。金属と氷の摩擦は弱いらしいが、一応摩擦はあるので、その摩擦熱で、氷が溶け、それが潤滑油になって、滑りやすくなる。こういう説もあると聞いてなるほどと納得してしまった。

また、人類の歴史は摩擦との闘いだと聞いて、また感心してしまった。確かに摩擦さえなければ今とても発達している移手段、例えば自動車などは必要でなくなるだろう（でも摩擦がなければ大変なことになるだろう）。また、レオナルドダビンチも摩擦の世界で活躍している事を知って驚いた。なぜなら彼は美術しかしていないと思いこんでいたからだ。意外だった。

人間の骨と骨の間にある軟骨も潤滑油の役割を果たしていると聞いて、また感心した。

琉球大学学生

自分の専門と異なる工学系の授業であったが、自分の世界が広がった気がした。一言に CO₂ 削減といわれても、具体的に今、どういった対処・研究がなされているのかわからなかったが、様々なことが行われている事を知ることができた。一番興味をそそられたのは生分解の潤滑油の利用である。今まで何か問題が発生すると、それに対応した物質を作り出そうと必死だった気がする。それは何でも作り出せると考えた人間のエゴかもしれない。現在求められているのは、すでに存在しているものをいかに利用するかが焦点となっている気がする。それをじっくり考えると水質・土壌汚染に関しても少しは容易に解決策が見つかるかもしれない。今回の講義でてきたのは植物油の潤滑油やサトウキビやトウモロコシのエタノールによる燃料である。まだ、完全なものにはならないかもしれないが、これから、自然を保全していくうえで必要不可欠な研究であると思われる。

最後に質問であるが、人間の関節は結構長い間、持続して使用することができている。この関節の原理を機械に導入した場合、もっとよりよい摩擦係数の低下はのぞめないのだろうか。やはり、材料が変わってくれば、状況も違うのだろうか。もし、できないとしたら、人体（生命体）の関節は私達が考える以上にすごいものなのかもしれない。

《担当教官からの回答》

変形性関節症や慢性関節リウマチなどにより機能障害をきたした患者には人工関節置換術が行われますが、現在の人工関節の性能と耐久性は生体関節に遠く及びません。トライボロジスト（潤滑技術者）はヒトに近づく人工関節の実現を目指し、日夜研究に励んでいます。

九州大学学生

現代の社会において、車は欠かせない存在になっている。その中で、日本において MT 車よりも操作の楽な AT 車が増加し、これに伴い燃費が悪化したのも現実である。燃費の向上は CO₂・排ガス削減においても大きく貢献する。

燃費向上（→環境保護）を目指し、現代ではハイブリッド・直噴エンジン・無段変速機等の技術が用いられ、それぞれの研究が急速に進んでいる。その中で、無段変速機(CVT)はベルト CVT とトロイダル CVT があり、特にトロイダル CVT は摩擦・潤滑・摩耗と深い関わりがある。エネルギーのロスを減らし、車のパワーにも直接作用するトルクは $T=R_1 \mu W$ の式で与えられる。ここでトランスミッションを巨大化させないためには μ （トランスミッション内の摩擦係数）を大きくする必要があり、部品の摩耗によるパワーのロスを考えると表面を極めて滑らかにした超高純度鋼と圧力により粘度の高い固体となる特殊なオイルを用いる。また、潤滑油が直接環境に与える影響として、こぼれたり飛散した油による水質・土壌汚染がある。チェーンソー油の飛散や船外機用エンジンの未燃焼エンジンオイル等も環境に悪影響を及ぼす。そこで、これを防ぐ為に工場での油一滴管理が行われ、生分解性潤滑油の研究も進んでいる。ここで天然系植物油は通常使われている鉱油より生分解性が高く環境に優しい。その反面、酸化・熱安定性が低く、粘度等級が限られているので、使用しにくいという面も持っている。環境に優しい潤滑油を求めるのはまだまだ困難を要するが、便利で快適な車社会を手にし、環境を汚染してきた人間にとっての義務でもあるだろう。

《担当教官からの回答》

便利さの陰には、例えば炭酸ガスやメタンによる地球温暖化現象、フロンによる成層圏のオゾン層の破壊などが潜んでいます。学生諸君の英知でこれらの問題が解決されることを期待しています。

3-4 講義B2

他者を受容し共感できるか？ —カウンセリング・マインドの落とし穴—

長野 剛（九州大学大学教育研究センター助教授：心理学）

意図的に、講義タイトルに「？」マークを付けました。私達は、互いに受容し合うべきだ、共感し合うべきだと信じ込んでいるだけであって、受容や共感がどういうことなのかを不問にしてきているのではないかと考えたからです。受容し共感し合うべきだ（we have to … あるいは we must …）という前提と、受容し共感し合うことが望ましいと思うのはなぜだろうと問うのとでは、異なったディスカッションが展開されることになります。「？」マークを付けることによって、講義が問いの種まきをする場になれば何よりだと願ったのです。

講義タイトルに「カウンセリング・マインドの落とし穴」という副題を付けたのにも理由がありました。教育相談を担当なさる学校の先生方が、来談児の心を受容してあげよう、来談児の心に共感してあげようとなさる努力に対して、学校生活や教室での活動に順応している子供たちは応答するのですが、不適応に陥っている来談児は「フン」と言わんばかりにそっぽを向いてしまうという実情に日頃から接している私に、「～してあげよう」という心がけには限界があるという気づきがあったからです。受容や共感、心がけの問題ではなく、誠意や真心を尽くしたとしても、にっちもさっちもいかないときにこそ、意味のあることだと考えていたからです。私には、受容も共感も、もっと大切に取り扱いたいという想いがありました。

案の定、講義をめぐる討議のときに、いくつかの異議申し立てを喰らいました。その中で、私の心拍があがったのは、私が「良き教師であろうとして子供に接するのは、教師自身の評価をあげようということに他ならない」と断定的に言ったことへの福岡教育大の学生さんたちからの一斉の異議申し立てでした。教師が、自分の（評価をあげる）ために子供とかかわっているなど、私の物言いは、まさに言語道断だったのです。おそらく、私の問いの種まきは、教師に対する言われなき不信感の表明として伝わったのでしょう。その場に居合わせた福岡教育大の4名の学生さんのうち3名の学生さんには、もう耳を傾けてもらえませんでした。散った火花をどう消したものかというハラハラドキドキに苛まれた私は、疑問を投げかけるRさんと四方山話をしながら、お三方がレポート書きに精を出している姿を見やっていました。

受容と共感について、教師と子供という文脈で整理してみます。教師にしてみると「自分の（評価をあげる）ために」ということは全くなく、また「～してあげよう」というつもりもなく、「子供のために」最善を模索しての努力をしています。推察してみたいのは、教師のこうした努力が、受容とか共感という概念を獲得するまでに至っていない子供にはどう映るかということです。子供の年齢が低ければ低いほど、教師の素振りや気配や雰囲気といった、大人にはわけがわかっているがゆえ看過しているメッセージがダイレクトに伝わります。「このひっ算は、こうするのよ」という説明に耳目を向ける子供が、先生に教えてもらっていると受けとめるなら、この子供には先生が、教えてくれる（～してくれる）先生として映ります。先生に「～してやる」（丁寧な言い方をすれば「～してあげる」）つもりなどなくても、子供にはそうなのです。先生には「～のため」という思いがなくても、ひっ算で立ち往生していた子供は、先生が僕のために教えてくれたと受けとめることでしょう。子供

の心に映る先生は、「～のために」「～してあげる」に満ち満ちた人物なのではないでしょうか。このように子供に映る先生が「良き教師であろう」と努めるということは、子供たちの「～のために」「～してくれる」先生への期待という評価尺度に自らを合わせるといことになりかねません。この努力は、とても窮屈なはずで、す。「～のために」という目的的行為や、「～してあげる」というような受動と能動の関係が生じる行為からは、互いが互いを受容し共感する関係に至りません。

私が言いたかったのは、そもそも「良き教師」などと、教師の前に「良き」を付けるところに問題があるということです。良き教師であろうとする先生は、子供にも良い子供であってほしいと、知らず知らずのうちに先生自身の「良い」子の像を子供たちに当てはめてしまっているのではないかと危惧されます。悪い子を受容し、悪い子に共感することができるのでしょうか？「そんなことはない、どの子も「良い」子です」などと言わないでくださいね。

合宿共同授業の直後には皆無だったのですが、9月中旬になってから、質問のメールがちらほらと届くようになりました。大半のメールに『忙しい中、恐縮ですが…』といった内容の断り書きが添えられています。しかし、講義が、問いの種まきになっていることを確かめることができるので、私にはとても嬉しいことなのです。

以下に紹介するのは、10月のある日、私が3時間後にせまった「コミュニティ活動の心理学」という後期開講の授業の初回に、どんなテーマを探りあげようかと迷っていた最中に届いた、A大学のS君（男子）からのメールです。さっそく、この授業の初回レポート課題を『S君に返信メールを書く』にしました。一緒に、問い続けてみませんか。

長野 剛 先生へ 元気にお過ごしでしょうか？ 合宿でお世話になったSです。あの合宿は私にとって本当に有意義なもので、行ってよかったと思っています。長野先生の心理学の講義はとても印象的でした。まだまだお話が聞きたいと思いました。今回メールさせていただいたのは、「ヤサシサ」について、先生のお話というか、意見を聞きたいと思ったからです。合宿中も、ヤサシサについて少しお聞きしました。学校の先生の、単位の出し方の「優しさ」と「易しさ」について。「自然に優しい」についてのヤサシサ。など

「ヤサシイ」はいろいろな場面や状況で使われています。近頃、と言うか、二、三年前くらいからですが、この「ヤサシイ」と言うことばの意味がわからなくなってしまいました。私はよく、やさしい人だとか、いい人だとか言われます。でも全然うれしくないし、いい気持ちにもなれません。相手は私のことを本当にわかってくれてそう言ってくれているのかもしれないし、私がただひねくれているだけかもしれません。

しかし、私が思い知らされたことに、「善意が必ずしも善行であるとは限らない」という経験があります。自分は相手のことを考えているつもりで、つまり自分的には優しく接していたつもりでも、相手にとっては「おせっかい」とか「ほっといてくれない？」という場合がありますよね？そのことに気づいた時、やさしさっていったいなんだろう？と思い始めるようになりました。これは彼女の場合でも友達の場合でもです。

いままで自分の中で「良し」として捉えていたことが、他人にはそう伝わらないことがある。そう思った時、じゃあどうやって人と接していけば人間関係が保っていけるんだろう？ 考えても答えのでもものではありませんでした。

どうやったら人とうまくやっていけるのかなあ。どうしたら自分のことみてくれるかなあ。嫌われないためにはどうしたらいいかなあ。疲れ果てました。いろいろと。

どうでもよくなって、無関心でいること、ほっておくことを決めました。逆に無関心になられたり、ハミにされたりされる可能性は十分あったけど、それでもいいやと思うくらい疲れ果てました。なにせ、劣等感幼稚園時代の友達関係からすでに植えつけられていましたから。嫌うなら嫌ってくれ！そんな勢いでした。

でも、自分なりにヤサシサについては考えていました、ずっと。そしてやっとひとつ、それなりに納得いく答えがみつけれられたのが、「優しさという名のおせっかい、そっとしておく思いやり」という言葉でした。どこかで目にした受け売りなんです。今はそれなりに満足いく生活を送れています。不満を言ったらキリはないけれど。今の自分になれてよかったと思えるのは、やはり周りにみんながいたからであって、嫌いな奴もいるけれど感謝しています。

本当の「優しい人」になれたらなと思います。どうしたらなれるのかはわからないけど。先生にとって「ヤサシサ」ってなんですか？ 長々と駄文、すいません。 (A大学 Sより)

学問や研究は、問いにピリオドを打つことなく、問い続けることですよね。すでに自明である（わかりきったことである）とされる事柄は、学問や研究の対象にはなりません。小学校から高校までの学習は、誰にとっても正しい答えとして認められていること、つまり自明（わかりきっている）とされる事柄を修める期間でした。それだけに、生徒から学生になったとたんに、学習で培った学びのスタイルとは別に、首をかしげることが生産的である学問用の学びのスタイルを駆使しなさいと言われても、それこそ首をかしげざるをえませんよね。

社会に出ると、時間という制約があって、物事をその都度、判断していかなくてはなりませんから、「なぜだろう？」「何なのだろう？」と問い続けると、仕事に支障が生じます。でも、学生の時期に、問うことに堪能になっておいたら、have to (must) 型の「ねばならないオジサンやオバサン」になることを回避できるのではないかと、考えたりするのです。

どうしてもジジババ臭い（老婆心もどきの）締めくくりになりますねえ。

3-5 講義C1

コミュニティづくりと共感

西崎 緑 （福岡教育大学教育学部助教授：社会福祉学）

《講義要旨》

今日の人々の生活においては、「個」が優先されがちである。しかし人間の生活は、個としては完結し得ず、コミュニティとさまざまな関わりを持っていく。そこで、個人の生活を豊かで実りあるものとするためには、結局のところコミュニティをより快適な状態にしていくことが必要であることに気がつく。

現在の地域社会が保たれているのは、コミュニティの誰かが気遣い、汗を流す努力をしてくれているからである。コミュニティをその構成員である誰にとっても暮らしやすい状態にするためには、そこに暮らす人間ひとりひとりがコミュニティを受容し、慈しみ、その維持と発展のために行動することが必要になる。

それを可能にするのは、私たちひとりひとりが、他者に対する「共感」を自らの内面に育み続けることである。共感こそが、他者と共に生きる覚悟をさせ、コミュニティづくりのために行動する意欲を起こさせるものである。

《学生の感想から》

長崎大学

討議では、マイノリティな方の採用をすすめる Affirmative Action の話から始まり、No Work, No Buy 運動やルーズベルト時代の話、「戦争は平等化を進める」という話をした。しかし、戦争は役に立たない障害者などへの淘汰も起こるという話から障害を持つ人（異質な者）との接触に話に移った。中でも、肉体感覚の軽視の話では、バーチャル世界の意義なども含めながら充実した話が続いた。各自が自らの体験を交えながら、積極的に討論していたので、奥深い話し合いができたと思う。

コミュニティに関わる問題は、幅は広く深い、その分身近な問題なので、とっかかりやすく、実感を持ちつつ捉えることができた。更にコミュニティが身の回りのことであるので、他の様々な問題とも絡めて考えることができた。

琉球大学

現代人のコミュニケーション能力の低下と、身体感覚の軽視は、社会の様々な問題の一つの要因となっているのではないかと以前から感じていました。今回の講義と討議を通し、改めてこのことについて見直す必要があると思いました。（中略）

人間は、生涯の内に経験出来ることに限りがあります。だから経験が全てだと言うことは出来ません。だからこそ、それを補う想像力が重要だと私は思います。他者の気持ちを想像すること、自分の行為によって起こる結果を想像すること、その想像力の根本に経験があれば、それはよりリアルに近づくのではないかと考えられます。

肉体と精神が等価である、そのバランスのとり方をもう一度見直せばと思いました。

福岡教育大学

私は、地域の人とすごく仲良くなりたと思うのですが、なかには地域の行事にだれ一人として参加しないという家族もあります。また、討議のなかでも話したのですが、私の地域には知的障害の人のための施設があります。祭りでは、彼らが舞台上で踊ったりして、みんなで楽しんでいたのですが、彼らとの交流は、私の知る限りでは一年に一回ぐらいしかありません。同じ地域に住んでいながら交流がないというような状態をどうにかしたいと思うのですが、何をしたらいいのか。

九州大学

考えを述べるということより、それぞれの地域の様子を直に見た人から聞いたということは、とても身になった気がした。専門的なことから本当に自分のことまで、参加した6人がぼつぼつだけ話していけて充実していた。多少、反論・異論が出てきて討論というものが味わえた。

長崎の住居と高齢者の話、沖縄の障害者の話、福岡の祭の話、そしてアメリカにおける黒人差別の話。たった6人でもこれだけ異種の話題がのぼったということが、私の中でとても印象に残った。

西崎教官から

共生を考えるためには、生活者としての感覚がどうしても必要だと考えていたので、身近なコミュニティを私の講義の題材に選びました。講義や討議に参加してくれた学生の皆さんが、自分の住んでいるコミュニティを見直してくれたので、当初の目的は達せられたことと思います。若い皆さんには、これから自分が共感を持てる幅と深さを広げ、共生を大切にする考えと実践を表裏一体にすることに取り組んでもらえたらと思います。

それから合宿名物の久住登山は、お天気にも恵まれ、登山した全員が無事帰れて幸いでした。もちろん、その背後には山のベテランの先生方が周到的な事前準備をして下さったことがあるのですが。私も学生さんにリュックを持ってもらい、何とか登り切ることができました。おかげで、あの登山は、この夏一番の思い出になりました。ありがとうございました。

3-6 講義C2

沖縄島北部の一流域林の変貌

新里 孝和

(琉球大学 農学部附属亜熱帯フィールド科学教育研究センター 助教授)

(専門分野：森林・沿岸域資源学)

《講義要旨》

適切な森林管理は私たちの共通の未来を念頭において、持続可能な施業を実行していくことである。人間は従来、生態系の総体である生態地域の生き方、土地固有の生態系に根ざした生活、文化を創造してきたと考える。わが国の土地の大部分は潜在植生として森林を極相とする。地域植生のスケールをいろいろな縮尺の見方で解釈すると、流域単位にしても、小さな沢の植生から大きな河川流域、さらに全流域、と広がりを見せてくるだろう。

それらの基本的植生が森林に収斂される。森林を生業とした時代は、林地から得られる木材や山菜のような産物だけでなく、それを取り巻く環境、水源林、魚付林、土地保全、御嶽林、など森林は生態地域の総体の基本にあり、人間は地域に責任を持ち、森林自然を崇めた。

森林を生業としたわが国の林業は消滅していくのだろうか？経済社会に乗り、安い木材が外国から入ってくる、それに対抗するかのように拡大造林が行われ、農地造成として森林が開墾され、御嶽林は孤立し、水源はダムに委ねられる。沖縄島北部地域は山原（やんばる）と呼称され、かつては都市住民から侮蔑の対象とされたが、山地形で都市地区から離れていることなどで開発が遅れ、森林自然の多くが保存され、今日では都市住民の貴重な余暇活動地域となっている。その山原も経済社会の中で森林が減退し、変貌しつつある山原の一小流域の土地利用の変遷と植生の関係をみながら、私たちが地域と向き合うこと、地域の生業と自然のこと、地域の広がり、そしてこの機会に森林との共生について意見を交換することで、また新たな視点を見つけることができれば、と思う。

(使用機器) OHP

(参考図書)

書名：「森との共生—持続可能な社会のために」 著者名：藤森隆郎

発行所：丸善株式会社 発行年：2000年 価格：780円＋税

《学生レポート》より

討論の途中で問題になった自然林にヒトが手を加えることについて論じてみようと思う。自然林とは人の手の加わっていない森林のことであるので、ひとたび人の手を入れると管理が必要となる。討論の途中でも発言したが、仮に植物の生産量を高めることが目的であるならば、極相林よりも遷移中のほうが都合がよいが、そこはもはや自然林ではなく人工林となる。ということは自然林とは人の作為的感情を入れてはならないエリアということになり、人が深く関りあうなかでの共生は望めない。とすると昔より日本人が利用してきた森林＝人工林はさっき自然林に望めなかったことを行える。しかしながら外国材の輸入、エネルギー資源の移行によって人々が森林に興味をもたなくなり、放棄してしまう一方で

森林がどんどん弱化する現状の中“誰が管理を行うか”ということが問題となってくる。里山との共生の例に倣えば住民が行うのが最善であるように思われるが、住民がもはや山との接点持たない以上自治体が行っているが手が行き届いていない。この状況は沖縄、日本各地だけでなくイギリスを初めとするヨーロッパでも起こっている。そこでイギリスでは住民が山との接点を取り戻すため柴刈りを行ったりしている。里山に人が入るようにすることから始めるのだ。そして里山を人が管理する上で望ましい状態にもっていこう、とする試みである。日本でも各地で試験的に行われているが、沖縄にはハブという人間から見ると厄介な生き物が生息しているため、気軽に里山に出入りするようには難しいと思うが、里山という過去の日本人が持っていた財産をむざむざ失うのは勿体無い。里山という林を失うことは表土や水資源を失うことにもつながる。自分の所の林を使うことなく消費を続けることは人の所の林を傷付けることに気付かねばならない。先生の話によれば現在の学術的な環境保護の認識と地域住民のその間にかかなりの食い違いがみられる。シンポジウムなどで理解を深める必要がある。時間はかかるだろうが通らなければならぬ道であろう。(九州大学 萬歳明香)

3-7 登山

登 山

小山 紘三（九州大学大学教育研究センター助教授：建築計画）

昨年度に引き続き登山を担当しました。《事前通知》、《登山指導（登山前日）》、は昨年とほぼ同様です。第26回の報告書をご覧ください。

本年度で変わったことは、参加学生数が95名から64名となったことです。それにより班を学生8名に教職員1～2名が加わる8班で構成しました。学生フォーラムのグループ討議においても同様に、1班8名としましたが、それなりの効果があったように思います。以下学生の感想を掲載します。

福岡教育大学学生

登山班、部屋、フォーラムと、すべて人がバラバラなのはどうかなあと思ったが、実際はいろいろな人と交流がもてて、とてもよかったと思う。コースもそこまで死ぬほどキツくもなくて、よかった。

九州芸術工科大学学生

普段やらないような歩き方ができた。手をついて、手触りを（無意識にでも）感じながら歩くなど、町中の生活ではなかなかない。においや風をたっぴりと感じて、なかなか気付かないことに接して、何かひとつ新しい事に気付いた人もいるんじゃないでしょうか。

九州大学学生

自分の体力を過信し、チームワークを微妙に乱すような格好で暴走したら、結局途中でバテた。その後みんなで一緒にまわりの風景を楽しみながらゆっくり歩いたら、走っていた時よりも多くの事柄に気付くことができた。研修所に到着したあともひとがんばりして入った温泉が非常に気持ち良かった。あの頂上で日の出を見たら最高だろうなと思った。

九州大学学生

これはもう楽しかった、の一言に尽きる。いろんな大学の人と話しかったから、同じ班に九大生がいなくてラッキーだったし、前日フォーラムの司会をやったおかげで、初対面の人と話するとき「司会の…」という感じで覚えてもらって嬉しかった。久住は10年ぶりくらいに登ったが、結構楽しかったかな、と思う。まあ、いろんな人と話をしながらだったからあつという間だったのかもしれないが。個人的には“ビリ班”でいろんな話ができ楽しかった。下山して飲んだビールが最高に美味しかった。

佐賀大学学生

小学校の遠足以来の久住山でした。山を歩きながら仲間との会話もできたし、助け合いとかできていたと思います。頂上に立って下からふき上げてくる上昇気流を目をつぶって耳や体で感じることもでき

た時、とても贅沢な気分になりました。登山は共生をそだてるものだと思います。

佐賀大学学生

すごく楽しかった。武田さんと同じ班だったけど、そのパワーを尊敬します。私もけっこう登山を甘く見ていて、山頂が見えてきたあたりで“まだあんなにあるの？”って本当にもうやめたいと思いました。もうひたすら登ることしかできなくて、最後は本当きつかったけど、ついた時はうれしくてまたやりたいとまで思ってしまいました。きついのもいいものですね。

長崎大学学生

ずっと、最後までピリで歩いたんで、温泉には行けなくて残念だったんですけど、みんなと沢山話せたことが本当によかった。すごく、やっぱりきつかったけど、頂上に着いた時は、すごく達成感があったし気持ちよかった。自分の歩いてきた道を見ながら、人と話しながら登山できたのは、すごく感動だった。

長崎大学学生

かなり疲れた。頂上が見えないような山に登るのかと思うと、初日からかなり憂うつだった。実際に登ってみると、遊歩道もないし道はぬかるんでるし、一回死にかけたし、とんでもない登山だった。でも、頂上に着くと、やっぱり登ってよかったと思った。

琉球大学学生

登山は本当に楽しかったです。久々にあんなに自然のまっただ中で体を動かして、心にも体にも栄養が補給されたようでした。今更だけど、もっともっといろんなものを見て聞いて触れて、五感全部を使って、楽しみたかった。もっともっといろんな発見をしたかったと思いました。まずはもっと体力をつけたいわと思いました。

琉球大学学生

久し振りにあれだけの量を歩いた気がする。見るものすべてが新鮮で発見する事が多かった。班員が不思議とまとまり、終始なごんでいた気がする。歩きながらの様々な会話や何気ない気配りがとても気持ちを楽しませたし、一体感がうまれた気がする。天候が危うかったが、霧が晴れたり、でてきたり、雨が降ったりと全て体験できたのが良かった。いい仲間といい経験ができた。

4-1 合宿共同授業の学生の感想（抜粋）

- ※ 4泊5日がこんなにはよいものだとは思いませんでした。また、絶対に会いたいです。そのときは学生とだけでなく、もっともっと先生方と話がしたいです。来てよかったです。ありがとうございました。
- ※ 欠席した人の代わりにフォーラムの司会を務めることになった。サークルでミーティングの運営を何回かやったことがあるので、それと同じような気持ちで臨んだからあまり緊張はしなかったし、まあよくできたかなと思う。もっと人の意見をまとめられればスムーズに進行しただろうし、いろんな人が発言する機会も増えたように思う。昨年度の報告書を読んだ際、「知識の披露の仕合になった」という声がいくつか挙がっていたので、そうならないよう気をつけたつもりだったが、今年も少しその傾向が出たんじゃないなと思う。
「高齢者との共生」「自然と人間の共生」とわかりやすいテーマを取り上げることで、もっと多くの人に発言してもらおうと意図したが、なかなか思うように話をふれなかったし、全員が発言したわけではないので、司会業の難しさを感じた。
- ※ 自分のこれからの課題が見えてきました。とてもよい経験をしたと思います。
- ※ 山登りは、小学校の遠足以来で、別に楽しみにしていたわけではなかったけど、実際参加してみるととても楽しかった。山に登るのが楽しかったのもあるけど、むしろ登りながらみんなといろいろな話をするほうが楽しかった。普段、自然と触れあうことが少ないだけに、こういう大自然と触れあうと身も心もいやされるような気がした。岩が多くて危なかったけど、それもかえって楽しかった。
- ※ 様々な所から集まった中でも、沖縄から来た人の地元を愛する心に感動しました。自分はあまり長崎の自慢ができないので、もっと地元について知っていこうと思いました。この合宿に来て、もっと勉強しなければならないと感じると同時に、自分とは違う考えの人と多く接して自分の幅を広げたい。また、様々な意味で自分のためにこれからの人生を生きていこうと思いました。
- ※ 自分を出し切れなかったことが、後悔です。なんだか自分の悪いところをいっぱい知ってしまったけれど、これからは生かせるといいなあと思います。世の中にはしっかりした人がまだまだいるんですね。
- ※ いろんな人が様々な意見を自分なりに言っていた気がする。約半数のメンバーが発言し、発言できなかったメンバーをいかに発言してもらおうか、どういう場が意見をいいやすいのか、今後の課題かと思った。しかし、最後の全体討議は、フォーラムのときより、皆の表情がやわらかく、少しは意見や自分の気持ちが言えたのかなと感じた。テーマが大きすぎて、どうしていいかわからないというのも感じることもあったが、自分にはない発想や話し方に、様々な人の魅力を感じたことはものすごく今後の自分にプラスになると思う。
- ※ 共生というのは、なかなか難しいテーマというか、大きなテーマで、班別にバズセッションをしても、あちこちに話が飛んでしまい収拾をつけるのが大変でした。その時に強く感じたこ

とは、今回の合宿は、様々な大学、学部の人達が集まっただけあって、人によって感じる共生が全く異なるということでした。大学別によって提出されたレポートにおいても、それは顕著に現れており、自分にはない視点からの意見を大変興味深く観察しました。今回、フォーラムの時間が2日間、5、6時間しかなかったのも、もっと議論を深めたいなと思いました。

- ※ いろいろな人の意見をいっぱい聞いてよかったです。一人一人得意分野があって、新しい知識も得ることができました。自分の学部・学科の知識だけでなく、他のことももっと勉強していかないといけないと感じました。それと同時に、自分のもっているものを相手に伝えることも大切だと思いました。自分の思っていることは、言葉にしないと相手に伝わらないので、きれいな言葉じゃなくていいから、自分の言葉で相手に伝えていきたいです。決まった、ただ一つの答えを出すのではなく、本当はないかもしれない答えを見つけようと、もしくは少しでも近づこうとすることのほうが難しいけど、自分自身、たとえ答えを見つけられなくても、考えることをやめなくていいです。
- ※ やっぱり、いろいろな大学の教官の特徴が出ていて、とても面白かったです。特に、野外授業と講義Dの芸術文化をいかした町づくりは、普通の講義ではできないこと、やらないことをやって、すごく自分にプラスになったものが大きいです。講義だけじゃなくて、レポートを作る時も、部屋でみんなで話し合ったりとかするとき、みんなすごい勉強してるなあとか思って、すごい刺激になりました。自分は、法文学部だけど、農学部の話とかを聞いて、農学系と文系の学問もどっかでつながって、他の分野の勉強も必要だなと感じました。
- ※ 他の大学の学生と、同じ一つのテーマ「共生」について話し合いができたことは、絶対自分の身になると確信しました。自分は、法文学部の学生ということもあり、農学部の話がとても新鮮で、自分の今までの物事を考える時の一方向性を教えてくれたと思います。今回のフォーラムを通して、今までの自分の勉強の姿勢が恥ずかしく思え、今のままの勉強量、質ではいけないということを実感しました。そして、最後の討議は、自分の人間としての不完全さを感じさせてくれました。同じ大学の人に、自分が与える空気、プレッシャーが、重荷となっていたことがとてもショックでした。自分には他者を受け入れ、そして自分のことも理解してもらおうという姿勢がなかったんだと思います。反省。新しい考え方の理解など私にとってもいろんなことを与えてくれたフォーラムは、今回の最高の思い出の一つです。
- ※ 自分の専門ではない、大学では受ける機会のない内容を学ぶことができ満足しています。今まで、自分の中にあったイメージだけの言葉、勝手に決めつけていた部分が多くて、「あー、実際はそういうことだったんだ」と知ることができて良かったし、自分の学ぶべき分野だけにこだわる必要は全くなくて、興味があることは、どんどん調べたり聞いたりして、自分で動いていくべきだとすごく感じました。そういう意識を持った時点で、この合宿に参加する前の自分とは違う、変わっている！！と気づきました。
- ※ フォーラムが始まる前は、ちゃんと話し合いになるのかとか、自分の意見が言えるかだとか、不安ばかりだったけど、いろいろな人が意見を言っていたし、個人的にこんな状況があるんだとか、この意見はおもしろいなとか、とても刺激的でした。最後の全体討議では、うち解けた感じで、発表もしやすかったし、とてもいい雰囲気だなと感じました。人前で自分の意見、感想を発表す

る機会は少なかったので、とてもいい経験でした。反省としては、もう少し意見を発表する機会を作ればよかったなと思いました。

- ※ 90分にしておくにはもったいない充実した講義ばかりで、とても楽しかったです。新たな視界が開けたと思います。あれも勉強したい、これも勉強したいという想いが日に日に強まっています。この合宿の授業をきっかけとして、この想いはきっと育てていけると、今確信に近い実感をもっています。私は、環境科学部なので、共生はヒトとヒト、ヒトと自然、どちらの意味でも身近なテーマとしてもっていました。しかし、ここに来て、共生に対する感情も、また大きな意味での環境という感情も、講義さらには講義をきっかけとするフォーラムなどで深まっていったと思っています。それは、他大学の他学部の人達が多様に集まる場であったことも大きいけれど、その場を有効にしてくれた講義の意味は大きいと思っています。
- ※ 今回、この合宿に来て、本当に楽しく、もっと長くみんなで過ごしたかったと思いました。九州の各地からみんな来ていたので、いろいろな場所のたくさんの友達ができ、本当に自分にとってかけがえのない思い出になったと思います。
- ※ 一番思ったのは、自分は勉強不足だったんだなということであった。今まで、世界の情勢とかにはあまり関心がなく、「私は、ゴーイング マイ ウェイで行くぞ!!」という感じだったのだが、自分の同世代の人達が積極的に発言するのを見ていて、すごいいい刺激になったと思う。私も、自分の興味ある分野のことだけ突き進もうとするのではなく、いろんな広いことに関心を持ちたい、または持つことが大切だと思った。討議、フォーラムの時間は、それまでの私に広い視野をもつという考えを与えてくれた。
- ※ 皆、物知りですね！ と痛感。その姿勢、その真剣、その冷静、その秩序良さ。一時的にディベートになったが、互いに勉強できたよかったと思います。中国人としての私は、早く中国を健康に成長させたいと実感しました。この合宿に来て、日本に来て、外から母国を見ることができ、やはり、痛いときは始まる時と感じ、魯迅を思いだし、医で救国より、むしろ文で救国。私も自分の分野で国の誇りになるように頑張ろうと思っています。これからも、自分の国の歴史と文化をもっと知り、もっと身につけ、もっと充実な交流ができるように、よりよく伝えるようになりたいです。
- ※ みんな素敵な人ばかりでした。本当にそのことが一番思い浮かぶことです。自分を持っていて、しっかり発言もできて、話す面白くて……。この合宿授業に参加できて、本当に幸運だったと思います。出会いを大切にしていきたいと思いました。
- ※ 登山班、部屋、フォーラムとすべて人がバラバラなのは、どうかなあと思ったが、実際はいろんな人と交流できて、とてもよかったと思う。コースも、そこまで死ぬほどきつくもなく、よかった。
- ※ 最終日の全体討議の間中、心臓の辺りがすごくキュッとなっていて、話し出すと泣き出しそう。結局手を挙げることができなかった。討議、フォーラムを通して、本当に多くの人々の様々な考えを聞くことができ、それをきっかけに眠れなくなるくらい、たくさんの事について考えた。私は、知識、考え方、考えを深めるきっかけ等、もらってばかりで、何もみんなに返せるものを

持っていなかった。知識量の圧倒的な少なさ、専門知識のなさ、自分の考えをまとめきれない未熟さ、意見を言えない自分の弱さに反省するばかりだ。落ち込みもしたし、人に何も与えることのできないことが悔しかった。きっと今回の経験をきっかけに、大学での授業の受け方、学びへの姿勢、変わることができるかと確信している。

4-2 教職員の感想

第27回合宿共同授業に参加して

山口 真邦（長崎大学）

今、合宿共同授業を終えて、改めて長大のメンバーを見たとき、当初メンバー選考会での、“くじびき”によるメンバー決定、お互い知らない同士が合宿共同授業に向けて幾度の事前学習会の機会を設けて、学生フォーラム及び懇親会の出し物の練習など、合宿に至るまでが私自身、長く感じられました。その分、合宿がとても短く感じてしまいました。

合宿共同授業に参加し、通常、仕事で経験できない「登山」など、体験できたことを本当にいい機会でした。また他大学の学生のみならず、教職員の方々との知り合い、語りあえたこと、何よりも勝る貴重な経験になりました。くじゅう登山は前日雨が降って天候が危ぶまれましたが、当日は何とか登れる天気となりました。今言えることですが、雨が当日降っていても、行けるところまで登ろうと私自身思っていました。（後日談）合宿期間は、私にとって学生時代にタイムスリップしたような感じでした。特にくじゅう登山に関しては、引率教職員として登ったわけですが、学生のみならず話しながら、登るきつさも忘れて、くじゅう登山を満喫しました。

参加した多くの方々が印象に残ったであろう「懇親会」に関しては、それまでの互いの初対面とか、ぎこちなさが解消された時間になったと思っています。この4泊5日の期間に、参加学生のほか、他大学の教職員の方とも話すことができとても短く、なごり惜しい“時”に思えました。

キャンパスでメンバーの学生と逢うたび、第27回合宿共同授業のことを思い出しながら省みる自分に、今でも4泊5日の“あの”時間がなつかしく思い出されます。

最後に、主管校の九大の方々、及び参加した他大学の学生・教職員の皆様、本当にお世話になりました。

4-2 教職員の感想

合宿共同授業と私

上江田 一雄（長崎大学環境科学部教授：化学）

第16回（1991年）からほぼ毎回のように参加してきた私にとって今回の合宿共同授業は、大事な事柄を改めて学ばせてくれた。それは、合宿共同授業の目的・意義を再確認できたことだった。

昨年までの合宿共同授業は、私にとって従来の実施方法・形態を踏襲したルーティン・ワークだった。だが、今回は様相が一変した。それは、文部科学省による予算カット、その結果としての参加大学数の半減および実施委員会の消滅という大きな変化だった。そのような状況下で、一抹の不安をもって臨んだ今回の合宿共同授業だった。

ところが、蓋を開けてみると、私の抱いていた不安は吹っ飛んだ。従来にも増して内容のあるプログラムが進行し、稔りある4泊5日が終了した。有終の美を飾った背景には、当番校である九州大学の並々ならぬご苦労を感じる。私は取越し苦労をしていた。

たとえ困難な状況にあっても、「九州地区国立大学の学生と教官が一堂に集まり、寝食を共にしながら研修することによって、学生と教官並びに大学間の交流を深め、かつ、同一テーマについて多面的に授業をすすめることを目的とする」（合宿共同授業の目的）ことに意義を見だし、その意義を共有できる大学が九州・沖縄地区にあるかぎり合宿共同授業はこれからも続くものと痛感した。

今回の合宿共同授業について

来年度の当番校は現時点で未定だが、「第28回九州地区国立大学間合宿共同授業」の役に立てばと思い、今回の合宿共同授業に関して5日間を振り返って気付いた点を記す。

（1）野外授業

初日の冒頭に設定した試みは、5日間を有効に使える点で良かった。従来は、第3日目の午前中に3コマの授業が行われていたが、授業が行えるフィールドの限定および講師の確保が頭痛の種だった。これらの問題を解消するためにも来年度以降も九大高原農業実験実習場が使えると便利だ。ただし、実験実習場の協力が必要だが。

（2）学生世話人打合せ

昨年度から行われているが、合宿共同授業を行うために共に努力しているという意識を学生に持ってもらうためには必要だ。来年度も是非行っていただきたい。

（3）学生フォーラム

第2日目と第3日目の2日間に渡って開催されたことは初めての試みだった。第2日目は個別フォーラムとし翌日の第3日目は全体フォーラムにしたことは、フォーラム・テーマ「共生を可能にする知恵とは？」を考える十分な時間が確保でき良かったと思う。さらには、メイン・テーマ「共生は可能か？」の深化にも役立ったと考える。

（4）講義

平行講義が2つあったが、平行講義の必要性はあるのだろうか。参加学生数60余名は1クラスで十分だと思う。学生が同じ講義を受講することによって、そこで得た共通の知識等に基づいてフォーラムを行ったほうがスムーズな討議ができると思うが如何だろうか。

（5）登山

申し分なかった。天気は良くなかったが、それでも参加者はくじゅうの山々を満喫できたと確信している。来年度も今年の方法を踏襲していただきたい。

4-3 オーガナイザーの感想

合宿共同授業雑感

淵田 吉男（九州大学大学教育研究センター教授：化学）

平成14年度の合宿共同授業は、文部科学省からの予算がなくなったことを背景に参加大学が昨年度と比べ半減し、6大学で行った。私は合宿共同授業には初めての参加で、しかもオーガナイザーを務めることとなった。数々の不手際があったものと反省している。しかし、参加された先生、事務官は勿論、学生の協力を得、結果的にさして大きな問題もなく終えられた。

以下、合宿共同授業の記録、感想を思いつくままに挙げる。

- ・ 参加者は、昨年度の126名から77名（学生59名、教職員18名）であった。
- ・ 合宿共同授業は、第1日目には野外授業の後、開講式と交歓会、第2日目には講義AとB（1，2）並びにそれに対する討議（1）と学生フォーラム（1）、第3日目には講義C（1，2）とD並びにそれに対する討議（2）と学生フォーラム（2）、第4日目には登山と懇親会、第5日目には全体討議の後、閉講式があった。
- ・ 開講式では、九州大学大学教育研究センター長の嵩教授から挨拶があった。
- ・ 各講義の受講者数は、野外授業（後藤教官）59名、講義A（上江田教官）59名、講義B-1（大野教官）17名、講義B-2（長野教官）42名、講義C-1（西崎教官）27名、講義C-2（新里教官）32名、講義D（藤原教官）59名だった。
- ・ 討議（1）は、3つの講義に別れ実施された。講義Aには30名、講義B-1には3名、講義B-2には26名が参加した。討議（2）では、講義C-1に6名、講義C-2に4名、講義Dには49名が参加した。
- ・ 学生フォーラム（1）では、「共生を可能にする知恵とは？」について班毎に討論した。8班（1班は、7～8名で構成）に分け、なおかつ学生間の交流を深めるため、各班には可能な限り異なる大学の学生を割り振った。班長には九大の学生を当てた。
- ・ 学生フォーラム（2）では、進行役に九大生2名（衣笠さん、桑鶴君）を当て、8班を一同に会し班別報告の後、討論を行った。
- ・ 登山には、学生59名と待機組を除く教職員8名が参加した。研修所での天候が悪く、待機組はかなり不安を抱いたが、結果的に雨にも降られず牧の戸峠まで全員が無事下山した。
- ・ 懇親会では、各大学から様々な余興が繰り広げられた。最後の琉球大学の余興では、全員が参加し大いに懇親を深めた。
- ・ 全体討議では、オーガナイザーが進行役を務めた。前日の疲れもなく、全員がそれぞれに討論に参加した。その後、閉講式でのオーガナイザーからの挨拶で全日程を終えた。

新しい形での合宿共同授業は、前回までの「九州地区国立大学間合宿共同授業」と比べ、諸事情で参加校が半減したが、6大学の参加という点では、昭和51年に開かれた第1回目の合宿共同授業の参加大学数と同じであった。参加者が減少したことにより、運営面では勿論、学生にとっても密度の濃い、充実した授業となったと評価できる。欲を言えば、企画立案での教官の密な連絡と積極的な参画が必要であったと反省される。

期間中、参加大学の教職員との打合せで、来年度の開催を決めたものの、その後に開催された九州地区国立大学教養教育実施組織代表者会議において、休止の提案がなされ、平成15年度の休止が認められた。しかしながら、積極的に休止または中止するとの意見ではなく、休止やむなしとの意見が多かったことを受け、平成15年3月に合宿共同授業の存続について、九州大学で討論した。その結果、省力的、効率的な運営、効果的な企画を立案し、平成16年度に再開するとの方向で検討しあうとことが決定された。これまでとは異なった新しい形での将来性のある合宿共同授業の再開に向けて検討を現在始めている。この実現のためには、企画・運営する教官が合宿共同授業の意義、目的を十分に理解することが先ず必要である。真に学生の成長を思い、情熱を持って当たる教官により、この合宿共同授業が発展的に存続していくものと確信する。合宿共同授業での、生き生きとした学生の姿を思い出すたびに是非とも再開に漕ぎ着けねばと、関係機関、関係諸氏のご協力を切に願うものである。

総じて、今回の合宿共同授業は成功したと思っている。各大学の学生世話人、当番校として学生フォーラムの進行を務めてくれた学生さんに改めて感謝したい。また、参加大学の教職員の惜しみない御協力、九州大学全学教育事務室の上村庸子専門職員と瀬戸山澄事務官の多大なるサポートに対し、この紙面を借り心からお礼を申し上げたい。

4-4 アンケート調査の結果

1) 合宿共同授業を履修しようと思ったきっかけ

「(質問1) この授業に参加しようと思ったきっかけは何ですか」と、複数回答可として、次の6つの項目を用意した。

1. 自からの判断で参加しようと思った。
2. 同学年の友人、知人から誘われた。
3. 先輩から勧められた。
4. 大学の教職員から勧められた。
5. 単位がほしかったから。
6. その他

59名中、46名が、自らの判断で参加を決定している。先輩からの勧めもあって参加したのは琉球大学の学生のみ(4名)であった。同学年の友人、知人から誘われた(7名)としても、履修希望者が多く、一緒に参加が実現しているわけではない。なお、その他として「他大学の学生と知り合えるから」(2名)、「合宿という形式に期待して」(1名)、「開催場所が実家に近くて、自然が好き」(1名)という回答があった。

合宿共同授業があることを知ったのは、20名が掲示板によって、16名が入学時に配布されたシラバスや時間割(欄外)によってと回答している。学生対象の教育情報誌によって知り募集に注意を払っていた者もいる。合宿共同授業の案内は大学によって異なっており、入学時のオリエンテーションで紹介している大学もあるようである。

2) 事前学習で得たこと

「(質問2) 合宿に入るまでの事前学習(授業)で、あなたが得たものは5段階で評定すると、どの段階ですか」と尋ねた。

かなりのものを得た(5)、それなりのものを得た(4)、何とも言えない(3)、得たものはそれほどなかった(2)、得たものはほとんどなかった(1)とした平均値は、3.45であった。得たものについては、「自由な議論を遠慮なしにできる気安さ / 積極的に話すこと / 自分と違う考え方の者と討論できた / 話し合いに参加するコツ / 意見を交換することの大切さおもしろさ / 人前で自分の意見を言うことと人と話し合うことの大切さ」などのように、意見を発表する体験を指摘する回答が多かった。フォーラムレポートをまとめるにあたって「一つのレポートを複数で作成する難しさと楽しさ」といったことも他の授業にない体験のようである。

3) 合宿への期待

「(質問3) この授業の合宿への、あなたの期待度を5段階で評定すると、どの段階ですか」と尋ねた。

とても期待している(5)、期待している(4)、どちらとも言えない(3)、期待していない(2)、まったく期待していない(1)とした平均値は、4.00であった。まったく期待していないと回答した者はいなかったが、「期待していない」ないしは「どちらとも言えない」と回答した者が合わせて9名(15%)いた。

4) 各プログラムの5段階評価

最終日に、各プログラムと全体を振り返って、とてもよかった（5）、よかった（4）、どちらとも言えない（3）、つまらなかった（2）、まったくつまらなかった（1）の5段階で評価した。結果を以下の表に整理している。

野外授業	4.10			登山	4.89
講義A	3.60	討議A	3.74		
講義B 1	3.65	討議B 1	4.00	フォーラム1（班別）	4.58
講義B 2	4.38	討議B 2	4.20	フォーラム2（全体）	4.25
講義C 1	4.16	討議C 1	4.33	（最終日）全体討議	4.53
講義C 2	3.50	討議C 2	4.25		
講義D	4.74	討議D	4.83	合宿共同授業全体	4.66

5) 合宿初日と最終日の自己意識の相違

資料1と資料2に示すように、同じ事柄をめぐって質問紙調査を行った。7件法（ポイント1～7）で、質問項目ごとに、合宿最終日のポイントから合宿初日のポイント引くことによって、自己意識の変化を調べた。

初日の全項目の平均値が4.53から最終日の全項目の平均値の5.54へと変化しているのは、合宿最終日の心理的な高揚によってもたらされたものであると考えられる。したがって、1.00あたりに、変化の基線を引いて、図1を検討する。

合宿共同授業が正の方向にもっとも顕著に影響したのは、「(Q18) 周囲の人よりもすぐれた知識をもっている分野をもちたい」という思いであった。その他に、合宿共同授業の影響が大きかったと考えられるのは「(Q8) 仲間たちの中で欠くことのできない存在になる」「(Q9) 考えていることを言葉や文章にしようと努める」「(Q10) 他者にやってもらいたいことをうまく伝えることができるようになる」「(Q11) 人が困っている時に手助けできるようになる」といった抱負であった。

合宿共同授業が負の方向にもっとも顕著に影響したのは、「(Q2) 親や先生の期待に沿うことを心がけてきた」が、今後は以前のように、親や先生の期待に沿うことを心がけないという点である。その他に、負の方向に影響を及ぼしているのは、「(Q5) 同じことに関心を持ち、私の意見を支持してくれる人と出会いたい」とは以前のように思わなくなった点であり、「(Q7) 私のことをよく知っている友人をもっていた」けれども、そのことがそれほど重要ではなくなった点である。

合宿共同授業によって「(Q12) 理不尽なことや矛盾のあることにうまく対応していけるかどうか」も「(Q13) 何か失敗した時に自己を修正できるかどうか」も「(Q16) その場その場で自分の考えをうまくまとめることができるかどうか」も不確かであるが、それでも「(Q18) 周囲の人よりもすぐれた知識をもっている分野をもちたい」という思いがつのった学生達であるからこそ、その場その場のとりつくり終始することなく、失敗や不器用さを糧にして物事の本質的なところに関わっていくとする姿勢を培ったのであってほしいと願いたくなる。合宿共同授業が、自己省察の機会を提供していると捉えることが可能なのではないかと思いたい。

資料1 合宿初日の調査内容

(合宿初日の調査)

これまでの「私」について、今

(教示) この調査は、合宿共同授業を通して、参加者の自己認知が全体としてどのように変わっていくかを調べることを目的としています。これまでと、現在の「私」について答えてください。

※ 以下の質問それぞれを、7段階で自己評定し、該当する個所の ○ 印を黒く塗りつぶしてください

- 7段階 1：まったく当てはまらない
2：あまり当てはまらない
3：どちらかという当てはまらない
4：どちらとも言えない
5：どちらかという当てはまる
6：かなり当てはまる
7：そっくり当てはまる

- Q1 同級生や仲間たちとの交流を大切にしてきた
Q2 親や先生の期待に沿うように心がけてきた
Q3 いろんな対話の場面に気軽に参加してきた
Q4 自分の感情や気持ちを素直に表現してきた
Q5 同じことに関心を持ち、私の意見を支持してくれる人と出会いたいと思ってきた
Q6 自分と違う考え方や関心をもっている人と出会いたいと思ってきた
Q7 私のことをよく知っている友人をもっている
Q8 仲間たちの中で欠くことのできない存在になっていると思う
Q9 考えていることを言葉や文章にしようと努めてきた
Q10 他者にやってもらいたいことを、うまく伝えることができている
Q11 人が困っている時に手助けできている
Q12 理不尽なことや矛盾のあることにもうまく対応してきたと思う
Q13 何か失敗した時に自己を修正してきた
Q14 関心があるなら専門書を読もうと努めてきた
Q15 ある科目と他の科目の内容を関連づけて学習したことがあった
Q16 その場その場で自分の考えをまとめることができた
Q17 結果の見通しがつかなくても物事に積極的に取り組んできた
Q18 周囲の人よりもすぐれた知識をもっている分野がある
Q19 自分は世の中に貢献できると思ってきた
Q20 自分が打ちこめるものを積極的に探し求めてきた

資料2 合宿最終日の調査内容

(合宿最終日の調査) これからの「私」について、今

(教示) 合宿共同授業を終わるにあたって、以下の質問に対して、現在とこれからの「私」について答えてください。

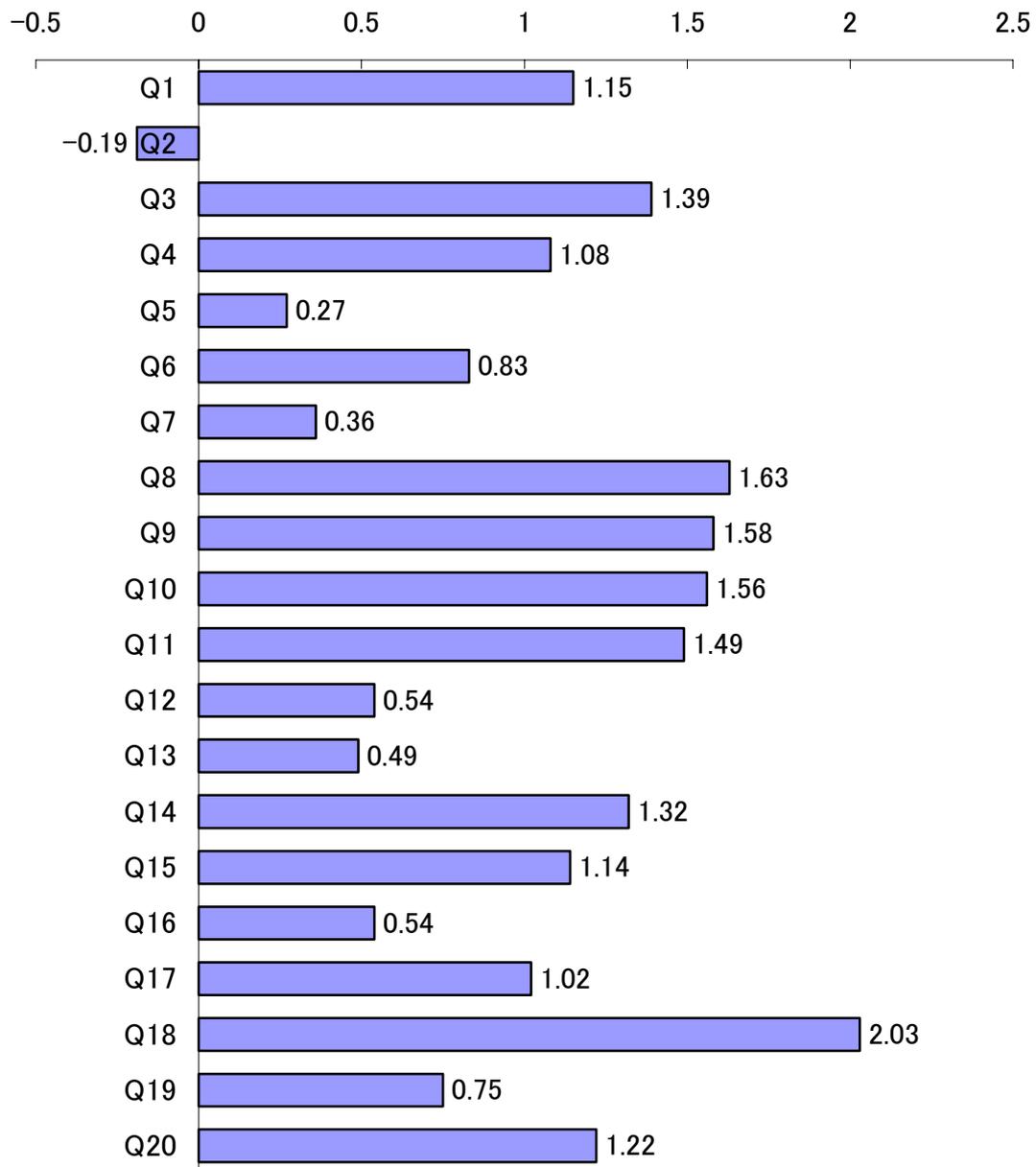
※ 以下の質問それぞれを、7段階で自己評定し、該当する個所の ○ 印を黒く塗りつぶしてください

- Q1 同級生や仲間たちとの交流を大切にしていこうと思う
- Q2 親や先生の期待に沿うことを心がけていこうと思う
- Q3 いろんな対話の場面に気軽に参加していこうと思う
- Q4 自分の感情や気持ちを素直に表現していこうと思う
- Q5 同じことに関心を持ち、私の意見を支持してくれる人と出会いたいと思う
- Q6 自分と違う考え方や関心をもっている人と出会いたいと思う
- Q7 私のことをよく知っている友人をもちたいと思う
- Q8 仲間たちの中で欠くことのできない存在になりたいと思う
- Q9 考えていることを言葉や文章にしようと努めたい
- Q10 他者にやってもらいたいことを、うまく伝えることができるようになると思う
- Q11 人が困っている時に手助けできるようになりたいと思う
- Q12 理不尽なことや矛盾のあることにもうまく対応していけると思う
- Q13 何か失敗した時に自己を修正することができると思う
- Q14 関心があるなら専門書を読もうと努めると思う
- Q15 ある科目と他の科目の内容を関連づけて学習していこうと思う
- Q16 その場その場で自分の考えをまとめることができると思う
- Q17 結果の見通しがつかなくても物事に積極的に取り組んでいこうと思う
- Q18 周囲の人よりもすぐれた知識をもっている分野をもちたいと思う
- Q19 自分は世の中に貢献できると思う
- Q20 自分が打ちこめるものを積極的に探し求めていきたい

合宿開始日の調査と合宿終了日の調査において、20 の同じ内容の質問項目を同じ順序で用い、7件法の指標も同じであった。ただし、合宿開始日の調査においては過去の自己を振り返り、合宿終了日の調査においては将来の自己を想定するように、教示と各質問項目の文章が異なっている。

図 1

合宿開始時と終了時の自己意識の変化



4-5 まとめと提言

今後の合宿共同授業

嵐 洪（九州大学大学教育研究センター長）

2002年度の合宿共同授業は、これまでの12ないし10大学から6大学へと参加大学が減少する中で実施された。参加学生もほぼ100名であったのが80名と減少した。今回も参加学生のこの授業に対する感想を読むと、積極的に評価するというものが多い。それは、異なる大学の学生と教師とが一緒になって作り出される授業という、普通の大学では行われていない講義形態に対する評価、自然の中で1週間の生活をそれまでは知らなかった人たちと共にするという、普通の学生生活の中では新鮮な体験に対する評価、そして講師の教官の授業に対する熱意に対する評価、といったものである。合宿共同授業のテーマは毎年変わり、講師も変わってきているのだが、これまで26回の開催における学生による評価は、おおむね良好であったといえる。

一方で、今回の合宿共同授業における参加大学の教員、事務官の評価も、良好であったように思う。特に主管校である九州大学の教官と事務官の評価は、今年度の講義や運営が例年よりはるかにスムーズに行われたというものであった。そしてその大きな理由のひとつとして、参加学生の減少をあげている。

合宿共同授業が発足の時あげた目的は、九州地区の国立大学の学生と教官が、同じ場所で数日間寝食をともにしながら研修し、学生と教官、大学間の交流を進め、一つのテーマに関して異なる視点からの授業をすすめる、というものであった。第一回は6大学（九州、佐賀、長崎、熊本、鹿児島、琉球）で始められ、そのご最大時は12大学の参加があったようである。参加大学の増加と参加学生の増加にともなって、合宿共同授業へむけた事務的な準備や打合せ、開催時の運営などについて当番大学の負担は増加していった。それが、参加大学と学生の減少の中で実施された今回の主管大学の教官・事務官の評価、すなわち準備や運営の容易さといった評価につながっているようである。これは、多くの大学の参加によって、できるだけ多くの学生に参加の機会を与え、いくつもの大学の教官が共通のテーマに関して異なる視点から講義を行うという、この授業が本来持つに違いない目的とはある程度相反するという皮肉な結果となっている。

このように、参加学生の評価は高く、教官も一定の評価をおこなってきた共同授業で、発足当時から問題とされていたのは、参加できる学生の数に限りがあること、それに対する各大学の教員や事務員の受け持つ役割、仕事量がかなり大きいことであった。そして発足してしばらくは、懇親会の盛り上がりや受講態度との間のギャップ（要するに懇親会に熱を入れすぎて、授業では寝てしまうなどこと）が問題にされたこともある。これらについては前回の報告書に、九州大学大学教育研究センターの高木誠前センター長が詳細に述

べられているとおりである。

合宿共同授業は、その特有の実施形態と統一テーマに対する複数の視点による講義内容ということで、各大学にとって特徴ある教養教育の一つとして位置づけられていたはずである。そして今回参加を見送った大学のすべてが、この授業に対して一定の評価をしているのも事実である。それにもかかわらず、参加を見送る大学が多くなったという現実には、負担に見合う利益が本当に得られているのか、という点に集中される。合宿共同授業にかける負担を考えれば、それに代わるもっと手近なところで効率よく達成できるのではないか。それを行うのが、最優先課題ではないか。参加を見送られた大学からは、それぞれの大学内にこのような意見が多いことをのべられている。準備や運営の省力化と講義の内容や質を高め独創性を強め、さらに多くの参加者をえるという三つの課題の克服が、今後の合宿共同授業のために求められている。

資料1

第27回 九州地区国立大学間合宿共同授業実施要項

1. 目的 九州地区国立大学の学生と教官が一同に集まり、寝食を共にしながら研修することによって、学生と教官並びに大学間の交流を深め、かつ、同一について多面的に授業をすすめることを目的とする。
2. メインテーマ 『共生は可能か?』
3. 主管校 九州大学
4. 会場 九州地区国立大学九重共同研修所
大分県玖珠郡九重町筋湯 TEL.09737(9)2617
5. 開催期間 平成14年8月23日(金)～8月27日(火)の4泊5日
6. 参加資格 九州地区国立大学に在籍する学生で当該大学が指定する者
7. 募集人員

福岡教育大学	6名
九州大学	14名
九州芸術工科大学	6名
佐賀大学	12名
長崎大学	12名
琉球大学	14名
合 計	64名
8. 日程 別紙記載
9. 講義・フォーラム題目等
 - 野外授業 草原の草資源とその畜産利用
九州大学農学部附属九大高原農業実験実習場
助教授 後藤 貴文
 - 講 義 (A) ホモサピエンスは滅びゆく存在か?—環境・資源・エネルギーと現代社会—
長崎大学 教授 上江田 一雄
 - (B-1) 環境に優しい潤滑油
佐賀大学 教授 大野 信義
 - (B-2) 他者を受容し共感できるか?—カウンセリング・マインドの落とし穴—
九州大学 助教授 長野 剛

(C-1) コミュニティづくりと共感

福岡教育大学 助教授 西崎 緑

(C-2) 沖縄島北部の一流域林の変貌

琉球大学 助教授 新里 孝和

(D) 芸術文化をいかした地域づくり

九州芸術工科大学 助教授 藤原 恵洋

学生フォーラム 九州大学 教授 淵田 吉男

テーマ『共生を可能にする知恵とは?』

登山指導 九州大学 助教授 小山 絃三

10. 「学生フォーラム」用のレポート提出について

各大学は、7月10日(水)までに九州大学へメール(テキストファイル)で提出すること。

11. 参加申し込み

- (1) 参加希望者は、当該大学の担当係へ参加費を添えて申し込むこと。ただし、既納の参加費は原則として払い戻しをしない。
- (2) 当該大学は、参加学生名簿及び教職員滞在計画書を5月31日(金)までに、九州大学あてに送付すること。
- (3) 参加費は、大学毎に釣銭がないよう準備し、参加者全員分を一括して、第一日目に会場受付で納入すること。

12. 参加費 12,000円(8月23日夕食から8月27日昼食まで)

13. 単位の認定

当該大学の授業の一部として、単位の認定するか否かは各大学の判断において行う。ただし、認定することのできる単位数は、2単位までとする。

14. その他

(1) 持参品

筆記用具、ノート、洗面用具、着替え類、パジャマ、日常使い慣れた薬、健康保険証(写)、体育館シューズ、トレーニングウェア、など

*「登山指導」の講義要旨に記されている服装と携行品も必ず準備すること。

(2) 集合

参加者は、各大学毎にまとめて、8月23日(金)午後1時30分までに野外授業会場に集合すること。

(3) 解散

8月27日(火)午後1時に現地で解散する。

参加者は、借り上げのバス及び航空機(琉球大学のみ)で各大学へ帰学する。

資料2 第27回の参加者名簿

1 参加者名簿（学生）

大学・学部	氏名
福岡教育大学	
初等教育教員養成課程	岩本 珠美
初等教育教員養成課程	黒仁田 典子
初等教育教員養成課程	小嶋 陽香
初等教育教員養成課程	竹田 舞
初等教育教員養成課程	原 明子
初等教育教員養成課程	◎山口 寛子
九州大学	
教育学部	◎衣笠 広美
経済学部	泉 拓郎
経済学部	桑鶴 知幸
経済学部	中村 勝人
理学部	堤 一真
理学部	蘭 直純
理学部	萬歳 明香
工学部	木村 啓介
工学部	山崎 弘志
農学部	堤 敬佑
九州芸術工科大学	
芸術工学部	◎越智 稔
芸術工学部	王 婷婷
芸術工学部	太田 一彦
芸術工学部	庄村 真智子
芸術工学部	竹田 都萌
芸術工学部	花田 勝暁
佐賀大学	
文化教育学部	朴 宣桂
経済学部	児玉 えり子
経済学部	末松 智子
理工学部	谷川 ゆかり
理工学部	手塚 将斗
理工学部	藤原 淑恵
農学部	井手 健太郎

大学・学部	氏名
佐賀大学	
農学部	川 埜 ゆかり
農学部	中 村 淳哉
農学部	◎松島 万将
農学部	吉 武 直裕
長崎大学	
経済学部	加藤 佑子
経済学部	川崎 雅輝
環境科学部	◎吉田 真菜
環境科学部	米村 幸泰
薬学部	永井 潤
医学部	飯田 由花
医学部	井出 志穂美
工学部	河野 裕介
工学部	黒須 敬太
工学部	廣瀬 敦規
工学部	古川 重信
工学部	渡辺 裕子
琉球大学	
法文学部	高梨 直
法文学部	当銘 博樹
法文学部	中山 彩
法文学部	屋良 朝昭
法文学部	◎吉田 航
理学部	伊澤 龍一
理学部	緒方 泰介
理学部	黒木 由貴子
理学部	田中 幸子
理学部	濱田 江梨
農学部	今井 裕里子
農学部	佐藤 みやび
農学部	戸澤 恵子
農学部	増井 信子

◎ 印は、学生世話人

2 参加者名簿（教職員）

大学・職名	氏名
福岡教育大学・助教授	西崎 緑
福岡教育大学・事務官	東 優希
九州大学・センター長	鳶 洪
九州大学・教授	淵田 吉男
九州大学・助教授	小山 紘三
九州大学・助教授	長野 剛
九州大学・事務長	小菜 範光
九州大学・室長	金子 秀男
九州大学・専門職員	上村 庸子
九州大学・主任	瀬戸山 澄
九州芸術工科大学・助教授	藤原 恵洋
九州芸術工科大学・専門職員	吉丸 俊幸
佐賀大学・教授	大野 信義
佐賀大学・専門職員	末次 隆司
長崎大学・教授	上江田 一雄
長崎大学・主任	山口 真邦
琉球大学・助教授	新里 孝和
琉球大学・大学院係長	上原 秀徳

3 各大学参加者数

大 学				
	教官	職員	学生	合計
福岡教育大学				
	1(1)	1(0)	6(6)	8(7)
九州大学				
	4(0)	4(2)	10(2)	18(4)
九州芸術工科大学				
	1(0)	1(0)	6(3)	8(3)
佐賀大学				
	1(0)	1(0)	11(5)	13(5)
長崎大学				
	1(0)	1(0)	12(5)	14(5)
琉球大学				
	1(0)	1(0)	14(8)	16(8)
合計	9(1)	9(2)	59(29)	77(32)

() は女子で、うち数

九州地区国立大学間合宿共同授業の経緯

1. 第1回九州地区国立大学間合宿共同授業開催に至るまでの経緯

(1) 昭和51年9月中旬に、九州大学武谷健二学長から奥田教養部長に、文部省・学長レベルの意向として『国立大学間合宿共同授業』の試みにつき、その趣旨等の説明があり、九州地区で実施の見込みがあるかどうか検討してほしいとの勧めがあった。

(2) この学長の意向をうけて奥田教養部長は、昭和51年10月6～7日の両日に開催された第25回九州地区大学一般教育研究会（於・大分大学）の際に、それに出席した長瀬佐賀大学教養部長、西岡熊本大学教養部長、高橋長崎大学教養部長の三人と会合し、共同授業の構想についての概要を説明し、意見を求めた。これら3大学の教養部長からは、いずれもこれに賛成する旨の意向が示され、九州大学が主催して、2月末から3月にかけてと、3月中旬の、前後2回に分け、長崎県島原市九州地区国立大学島原共同研修センターを会場とし、3泊4日の会期で、それぞれ100人ずつの規模によりこれを行うことに、意見の一致をみた。なお、各大学では、このための部内態勢をそれぞれ整えることについても、申し合わせがなされた。共同授業の実施を前後2回に分けたのは、参加希望者が多いのであろうとの予想と、入学試験の第一期校と第二期校との間には、2～3月の学内行事予定に差異があるので、参加の便宜を考慮する必要があるという事情との2つの理由による。なお当初は、第1回は文系講義に、第2回は理系講義に、それぞれ重点をおくことが予定されていた。

(3) 本共同授業の具体的計画は、昭和51年10月19日～21日の両日に開催された九州地区国立大学教養部長会議（於・琉球大学）に正式議題として発議され、上記4大学のほか、鹿児島、琉球両大学も強い参加の希望を表明したので、これら2大学を加えて、参加大学を6大学とすること、及び今回の計画と実施には九州大学が当るなどの合意が成立、同時期に開催中であった6大学事務長会議にも報告し、了承された。

(4) 各大学内でこの共同授業に対する態勢を整える必要上、昭和51年11月8日付で、九州大学武谷健二学長により、佐賀、長崎、熊本、鹿児島、琉球の各大学長あてに、この共同授業に対する協力の依頼、及び計画の具体化に関する事務連絡は九州大学教養部長を中心とする各大学教養部長間で行うことが適切であると思われることなどの、二点を提案する書簡が送られた。また同日付を以て、武谷学長から奥田教養部長あてに、共同授業の今後の企画運営等につき依頼状が送られた。

(5) この依頼をうけて奥田教養部長は昭和51年11月11日前記5大学教養部長あてに、共同授業の実施計画 試案を送付し、各大学派遣の講師名及びその講義テーマの回答を求めた。

(6) 11月25日までに、各教養部長から参加する旨の回答が寄せられたが、琉球大学を除く各大学の場合、講師及びその講義テーマについては未定である旨の内容であった。九州大学教養部においては、この間11月17日の教授会に正式に提案され、「総合科目」として単位を認定することの可否については、本教養部内の総合科目委員会で検討し決定するとの合意を得ている。

当委員会では、「2単位の認定には、計画案に予定されている授業時間数がやや不足しているのではないのかとの疑義が残るが、基本的には参加学生に総合科目として2単位を認定してよいであろう」との結論が得られた。

(7) 九州大学のほか、佐賀・琉球の両大学では、総合科目として2単位を認定することとなった。しかし、長崎、熊本、鹿児島 の3つの大学では、学内的に機が熟していないとの理由などで、今回は単位認定は行わない旨の通知があった。また九州大学教養部内では、共同授業を本年度2回に分けて行うことは、事務取扱い上、難点があるとの意見があったので、3月中旬の1回だけに止めることで、関係各大学に通知し、了解をえることができた。

(8) 九州大学は、以上のような経緯を経て共同授業実施具体案（要項案）を作成し、昭和51年12月25日付で、これを関係各大学に送付した。奥田教養部長は、単位認定を行いうるよう、この共同授業の形式をととのえるために、12月中旬文部省大学課と事務打合わせを行ったが、このことについては、上記具体案のなかに、備考として次のごとく付記してある。すなわち、「この共同授業は、形式上は当該大学の授業の一部として取扱われるものであるので、単位認定等については、当該大学の教授会が自主的に判断することになる。したがって単位認定のためには、参加大学は最低一名の講師をこの共同授業に参加させなければならない」というのがその内容である。

(9) 昭和52年1月27日～28日の両日、九州大学教養部の因幡庶務掛長と松崎教務掛長は、島原市に出張し、共同研修センター及び市内の状況を下見して、日程消化上の留意点などをチェックした。

(10) 昭和52年2月1日、奥田教養部長名で関係各大学教養部長あてに、実施要項とともに、受講学生募集の開始、参加学生名簿の作成、引率責任教官（又は事務官）1名及び参加教職員氏名並びにその滞在予定（なお教官は全日程に参加することを原則としている）につき、2月25日までに返答するよう、依頼状を発送した。

(11) 九州大学では、実施要項案の作成及び共同授業の企画・実施に際しては、学生たちのニーズとプログラムとの適合性を高め、本共同授業の運営と成果をよりよいものとするため、講義担当の講師以外に、とくに学生指導担当として、安藤廷男教授の参画を求めた。

2. 九州地区国立大学間合宿共同授業への各大学参加の経緯

昭和51年 9月…文部省・学長レベルの意向で「九州地区共同授業」の試みにつき、九州大学教養部長に検討依頼。

昭和51年10月…「九州地区大学一般教育研究会」に於いて、九州大学教養部長から佐賀・長崎・熊本大学教養部長に打診し、共同授業実施を4大学で申し合わせた。

昭和51年10月…「九州地区国立大学教養部長会議」に発議。佐賀・長崎・熊本・九州大学のほか

鹿児島・琉球大学も参加を希望し、参加大学6大学とした。

昭和53年 5月…九州大学学生部長名で、宮崎・大分・九州芸術工科・宮崎医科大学へ参加意向の照会を行う。

宮崎大学	参加申し込み
大分大学	参加申し込み
九州芸術工科大学	参加申し込み
宮崎医科大学	参加申し込み

昭和53年12月…九州大学学生部長名で大分医科・佐賀医科・福岡教育・九州工業大学へ参加意向の照会を行う。

福岡教育大学	参加申し込み
佐賀医科大学	参加申し込み
(その後、現在の開催日では参加不可能の連絡あり)	
九州工業大学	(55年度以降の)参加申し込み
大分医科大学	参加希望なし

平成 2年12月…九州大学教養部長名で鹿屋体育大学へ参加意向の照会を行う。

鹿屋体育大学	参加申し込み
--------	--------

平成 4年 3月…宮崎医科大学から参加不可能の連絡あり

平成13年 9月…九州工業大学から次年度以降の参加不可能の連絡あり

平成14年 3月…熊本大学・大分大学・宮崎大学・鹿児島大学・鹿屋体育大学から次年度以降の参加不可能の連絡あり

平成14年11月…九州大学から平成15年度の休止の提案あり

平成14年12月…平成15年度九州地区国立大学間合宿共同授業の休止決定

3. 九州地区国立大学間合宿共同授業の実施概要（第1回～第27回）

（注1）主管校は第1回から全て九州大学

（注2）参加人員の（ ）は教職員のうち数

第1回 メインテーマ 『戦後世界における日本』

開催期間 昭和52年 3月 9日（水）～12日（土） 3泊4日
開催場所 九州地区国立大学島原共同研修センター（当番校：九州大学）
参加人員 九州 37(9)名, 佐賀 15(2)名, 長崎 6(3)名,
熊本 16(1)名, 鹿児島 15(2)名, 琉球 14(2)名,
合計 6大学 103(19)名

第2回 メインテーマ 『現代の人と自然』

開催期間 昭和52年 7月11日（月）～15日（金） 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所（当番校：九州大学）
参加人員 九州 34(12)名, 佐賀 16(2)名, 長崎 10(2)名,
熊本 13(2)名, 鹿児島 16(2)名, 琉球 18(3)名,
合計 6大学 107(23)名

第3回 メインテーマ 『現代の人と自然』

開催期間 昭和53年 7月11日（火）～15日（土） 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所（当番校：九州大学）
参加人員 九州 27(6)名, 芸工大 5(1)名, 佐賀 17(2)名,
長崎 12(2)名, 熊本 16(3)名, 大分 6(1)名,
宮崎 6(1)名, 宮崎医 4(1)名, 鹿児島 17(2)名,
琉球 17(2)名,
合計 10大学 127(21)名

第4回 メインテーマ 『現代の人と自然』

開催期間 昭和54年 7月12日（木）～16日（月） 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所（当番校：九州大学）
社会福祉法人 朝日高原福祉センター（当番校：熊本大学）
参加人員 福岡教 7(1)名, 九州 43(8)名, 芸工大 8(1)名,
佐賀 23(3)名, 長崎 18(2)名, 熊本 33(13)名,
大分 12(3)名, 宮崎 5(2)名, 宮崎医 5(1)名,
鹿児島 17(4)名, 琉球 26(2)名,
合計 11大学 197(40)名

第5回 メインテーマ 『現代社会の諸問題』

開催期間 昭和55年 7月11日（金）～15日（火） 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所（当番校：九州大学）
社会福祉法人 朝日高原福祉センター（当番校：熊本大学）
参加人員 福岡教 2(1)名, 九州 48(9)名, 芸工大 6(1)名,

九州工 3(2)名, 佐賀 22(3)名, 長崎 9(3)名,
熊本 35(13)名, 大分 11(2)名, 宮崎 5(2)名,
宮崎医 5(1)名, 鹿児島 19(3)名, 琉球 26(2)名
合計 12大学 191(42)名

第6回 メインテーマ 『現代社会の諸問題』

開催期間 昭和56年 7月11日(土)~15日(水) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:長崎大学)
国民宿舎(ユースホステル)青雲荘(当番校:九州大学)
参加人員 福岡教 3(1)名, 九州 53(9)名, 芸工大 7(1)名,
九州工 2(1)名, 佐賀 25(4)名, 長崎 21(7)名,
熊本 10(3)名, 大分 11(2)名, 宮崎 7(2)名,
宮崎医 3(2)名, 鹿児島 19(3)名, 琉球 35(2)名
合計 12大学 196(37)名

第7回 メインテーマ 『コミュニケーション』

開催期間 昭和57年 7月12日(月)~16日(金) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:長崎大学)
参加人員 九州 60(11)名, 芸工大 11(1)名, 九州工 1(1)名,
佐賀 32(3)名, 長崎 14(8)名, 熊本 12(2)名,
大分 10(2)名, 宮崎 5(1)名, 宮崎医 6(1)名,
鹿児島 18(3)名, 琉球 31(2)名,
合計 11大学 200(35)名

第8回 メインテーマ 『男と女』

開催期間 昭和58年 7月16日(土)~20日(水) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:佐賀大学)
参加人員 福岡教 2(0)名, 九州 47(11)名, 芸工大 21(2)名,
九州工 1(0)名, 佐賀 36(13)名, 長崎 7(2)名,
熊本 11(1)名, 大分 9(2)名, 宮崎 4(1)名,
宮崎医 6(1)名, 鹿児島 19(4)名, 琉球 34(4)名,
合計 12大学 197(41)名

第9回 メインテーマ 『世界の中の日本』

開催期間 九重分校:昭和59年 7月14日(土)~18日(水) 4泊5日
島原分校:昭和59年 7月11日(水)~15日(日) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:佐賀大学)
参加人員 九州 55(12)名, 芸工大 15(2)名, 九州工 2(1)名,
佐賀 39(12)名, 長崎 3(1)名, 熊本 10(2)名,
大分 11(2)名, 宮崎 2(1)名, 宮崎医 5(1)名,

鹿児島 19(4)名, 琉球 34(4)名,
合計 11大学 195(42)名

第10回 メインテーマ 『世界の中の日本 -世紀末から21世紀へ-』
フォーラム 『日本の100年 -21世紀への展望-』
開催期間 昭和60年 7月12日(金)~16日(火) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:鹿児島大学)
参加人員 九州 47(10)名, 芸工大 12(2)名, 九州工 3(1)名,
佐賀 23(4)名, 長崎 4(1)名, 熊本 13(2)名,
大分 14(2)名, 宮崎 4(1)名, 宮崎医 4(2)名,
鹿児島 43(13)名, 琉球 36(6)名,
合計 11大学 203(43)名

第11回 メインテーマ 『地域の視点から』
フォーラム 『地域の可能性を求めて -沖縄の視点から-』
開催期間 昭和61年 7月16日(水)~21日(月) 5泊6日
開催場所 国立沖縄青年の家(当番校:琉球大学)
参加人員 福岡教 7(2)名, 九州 37(7)名, 芸工大 11(1)名,
九州工 3(1)名, 佐賀 33(4)名, 長崎 13(2)名,
熊本 17(2)名, 大分 13(2)名, 宮崎 6(1)名,
宮崎医 3(1)名, 鹿児島 27(3)名, 琉球105(31)名
合計 12大学 275(57)名

第12回 メインテーマ 『地域からの視点』
フォーラム 『九州とアジア』
開催期間 昭和62年 7月11日(土)~15日(水) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
参加人員 福岡教 8(1)名, 九州 25(10)名, 芸工大 6(1)名,
九州工 3(1)名, 佐賀 12(2)名, 長崎 7(2)名,
熊本 14(4)名, 大分 7(1)名, 宮崎 7(1)名,
宮崎医 2(2)名, 鹿児島 11(2)名, 琉球 17(2)名,
合計 12大学 119(29)名

第13回 メインテーマ 『地域を視つめて』
フォーラム 『日本の中の九州』
開催期間 昭和63年 7月14日(木)~18日(月) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:熊本大学)
参加人員 福岡教 4(0)名, 九州 20(4)名, 芸工大 6(1)名,
九州工 1(1)名, 佐賀 10(1)名, 長崎 11(2)名,
熊本 24(13)名, 大分 10(2)名, 宮崎 6(0)名,
鹿児島 12(2)名, 琉球 17(2)名,
合計 11大学 121(28)名

第14回 メインテーマ 『国際化を考える』

フォーラムテーマ 『異文化接触の中で』

開催期間 平成 元年 7月12日(水)～16日(日) 4泊5日

開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:琉球大学)

参加人員 九州 20(5)名, 芸工大 6(1)名, 九州工 1(1)名,
佐賀 15(5)名, 長崎 11(2)名, 熊本 13(3)名,
大分 10(1)名, 宮崎 10(2)名, 鹿児島 12(2)名,
琉球 30(14)名,

合計 10大学 128(36)名

第15回 メインテーマ 『生活と科学』

フォーラムテーマ 『現代社会に生きる』

開催期間 平成 2年 7月12日(木)～16日(月) 4泊5日

開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:佐賀大学)

参加人員 福岡教 2(2)名, 九州 20(5)名, 芸工大 6(1)名,
九州工 3(1)名, 佐賀 28(19)名, 長崎 14(4)名,
熊本 12(2)名, 大分 9(1)名, 宮崎 9(2)名,
鹿児島 11(2)名, 琉球 17(2)名,

合計 11大学 131(41)名

第16回 メインテーマ 『九州・沖縄 —その文学と風土—』

フォーラムテーマ 『九州・沖縄地域の文学 —伝統と可能性—』

開催期間 平成 3年 7月12日(金)～16日(火) 4泊5日

開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:長崎大学)

参加人員 福岡教 4(3)名, 九州 19(5)名, 芸工大 6(1)名,
九州工 3(1)名, 佐賀 12(2)名, 長崎 24(14)名,
熊本 14(4)名, 大分 7(2)名, 宮崎 5(2)名,
鹿児島 13(3)名, 鹿屋体 4(1)名, 琉球 16(2)名,

合計 12大学 127(40)名

第17回 メインテーマ 『九州・沖縄 —その風土と生態—』

フォーラムテーマ 『熱帯—沖縄—九州, 自然と文化の移り変わり』

開催期間 平成 4年 7月11日(土)～15日(水) 4泊5日

開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:鹿児島大学)

参加人員 九州 19(5)名, 芸工大 6(1)名, 九州工 4(1)名,
佐賀 12(2)名, 長崎 10(2)名, 熊本 14(4)名,
大分 6(1)名, 宮崎 7(2)名, 鹿児島 21(11)名,
鹿屋体 4(1)名, 琉球 18(3)名,

合計 11大学 121(33)名

第18回 メインテーマ 『九州・沖縄地域の開発と生活・環境』

フォーラムテーマ 『九州・沖縄地域の資源と暮らし』

開催期間 平成 5年 7月10日(土)～14日(水) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:熊本大学)
参加人員 福岡教 5(2)名, 九州 15(5)名, 芸工大 5(1)名,
九州工 7(1)名, 佐賀 12(2)名, 長崎 10(2)名,
熊本 19(9)名, 大分 7(1)名, 宮崎 8(2)名,
鹿児島 12(3)名, 鹿屋体 5(1)名, 琉球 16(4)名,
合計 12大学 121(33)名

第19回 メインテーマ 『九州・沖縄の自画像 ー過去・現在・未来ー』

フォーラム 『九州・沖縄の若者と文化』
開催期間 平成 6年 7月 9日(土)～13日(水) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:琉球大学)
参加人員 福岡教 4(1)名, 九州 18(6)名, 芸工大 6(1)名,
九州工 3(1)名, 佐賀 15(5)名, 長崎 12(3)名,
熊本 12(2)名, 大分 4(1)名, 宮崎 8(2)名,
鹿児島 13(3)名, 鹿屋体 3(1)名, 琉球 24(12)名,
合計 12大学 122(38)名

第20回 メインテーマ 『知性と感性 ー今 大学で何を学ぶかー』

フォーラム 『大学で何をするか』
開催期間 平成 7年 7月13日(木)～17日(月) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:佐賀大学)
参加人員 福岡教 5(1)名, 九州 16(7)名, 芸工大 6(1)名,
九州工 2(2)名, 佐賀 26(16)名, 長崎 15(5)名,
熊本 12(2)名, 大分 8(2)名, 宮崎 8(2)名,
鹿児島 12(3)名, 鹿屋体 2(1)名, 琉球 14(2)名,
合計 12大学 126(44)名

第21回 メインテーマ 『科学と人間 ー混沌の時代をいかに生きるかー』

フォーラム 『大学で何をするか』
開催期間 平成 8年 7月11日(木)～15日(月) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:長崎大学)
参加人員 福岡教 6(1)名, 九州 19(7)名, 芸工大 5(1)名,
九州工 5(1)名, 佐賀 9(2)名, 長崎 23(13)名,
熊本 12(3)名, 大分 8(2)名, 宮崎 3(2)名,
鹿児島 12(5)名, 鹿屋体 5(2)名, 琉球 14(2)名,
合計 12大学 121(41)名

第22回 メインテーマ 『共生の時代の科学・学問:今,大学で何を学ぶか』

フォーラム 『それぞれの学びと生き方ー学生時代をどうすごすかー』
開催期間 平成 9年 7月11日(金)～15日(火) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:鹿児島大学)
参加人員 福岡教 6(1)名, 九州 20(8)名, 芸工大 6(1)名,

九州工 6(1)名, 佐賀 12(2)名, 長崎 12(2)名,
熊本 15(5)名, 大分 8(2)名, 宮崎 8(2)名,
鹿児島 24(14)名, 鹿屋体 6(2)名, 琉球 14(2)名,
合計 12大学 137(42)名

第23回 メインテーマ『現代の科学・学問と21世紀への展望：過去・現在・未来』

フォーラム 『これからの大学：授業・カリキュラム，課外活動，学生生活』
開催期間 平成10年 7月16日(木)～20日(月) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校：熊本大学)
参加人員 福岡教 6(1)名, 九州 18(6)名, 芸工大 7(2)名,
九州工 7(2)名, 佐賀 14(4)名, 長崎 12(2)名,
熊本 26(16)名, 大分 8(2)名, 宮崎 8(2)名,
鹿児島 12(2)名, 鹿屋体 6(2)名, 琉球 15(3)名,
合計 12大学 139(44)名

第24回 メインテーマ 『人間と環境—よりよい関係を求めて—』

フォーラム 『人間と環境—いま，私たちに何ができるか—』
開催期間 平成11年 7月16日(金)～20日(火) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校：佐賀大学)
参加人員 福岡教 7(2)名, 九州 17(7)名, 芸工大 6(2)名,
九州工 6(1)名, 佐賀 25(13)名, 長崎 12(2)名,
熊本 12(2)名, 大分 8(2)名, 宮崎 6(2)名,
鹿児島 13(3)名, 鹿屋体 6(2)名, 琉球 17(5)名,
合計 12大学 135(43)名

第25回 メインテーマ 『人間の安全保障と平和：20世紀から21世紀へ』

フォーラム 『人間の安全保障と平和 —21世紀に何をなすべきか』
開催期間 平成12年 8月25日(金)～29日(火) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校：琉球大学)
参加人員 福岡教 7(2)名, 九州 17(5)名, 芸工大 7(2)名,
九州工 6(1)名, 佐賀 12(2)名, 長崎 14(4)名,
熊本 13(3)名, 大分 7(2)名, 宮崎 8(2)名,
鹿児島 12(2)名, 鹿屋体 5(2)名, 琉球 17(5)名,
合計 12大学 125(32)名

第26回 メインテーマ 『循環・共生型社会をめざして』

フォーラム 『循環・共生のライフスタイルとは』
開催期間 平成13年 8月24日(金)～28日(火) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校：長崎大学)
参加人員 福岡教 6(2)名, 九州 18(6)名, 芸工大 5(2)名,
九州工 8(3)名, 佐賀 12(2)名, 長崎 15(7)名,
熊本 11(2)名, 大分 11(3)名, 宮崎 8(2)名,
鹿児島 12(2)名, 鹿屋体 6(2)名, 琉球 14(2)名,

合計 12大学 126(35)名

第27回 メインテーマ 『共生は可能か?』

フォーラムテーマ 『共生を可能にする知恵とは?』

開催期間 平成14年 8月23日(金)~28日(火) 4泊5日

開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)

参加人員 福岡教 8(2)名, 九州 20(8)名, 芸工大 8(2)名,
佐賀 14(2)名, 長崎 15(2)名, 琉球 16(2)名,
合計 6大学 81(18)名

4. 九州地区国立大学間合宿共同授業参加費の推移

第 1回	2, 550円 (3泊4日)	島原共同研修センター
第 2回	3, 440円 (4泊5日)	九重共同研修所
第 3回	4, 800円 (4泊5日)	九重共同研修所
第 4回	5, 400円 (4泊5日)	九重共同研修所及び朝日高原福祉センター
第 5回	6, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所及び朝日高原福祉センター
第 6回	7, 000円 (4泊5日)	国民宿舎「青雲荘」及び島原共同研修センター
第 7回	7, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所及び島原共同研修センター
第 8回	8, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所及び島原共同研修センター
第 9回	8, 500円 (4泊5日)	九重共同研修所及び島原共同研修センター
第10回	8, 500円 (4泊5日)	九重共同研修所及び島原共同研修センター
第11回	13, 000円 (5泊6日)	国立「沖縄青年の家」
第12回	8, 500円 (4泊5日)	九重共同研修所
第13回	8, 500円 (4泊5日)	九重共同研修所
第14回	9, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所
第15回	9, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所
第16回	9, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所
第17回	9, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所
第18回	10, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所
第19回	10, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所
第20回	10, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所
第21回	10, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所
第22回	12, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所
第23回	12, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所
第24回	12, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所
第25回	12, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所
第26回	12, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所
第27回	12, 000円 (4泊5日)	九重共同研修所

〈参考〉実施会場の正式名称

九重共同研修所：九州地区国立大学九重共同研修所

(研修所に加えて、九州大学「山の家」も利用している。)

島原共同研修センター：九州地区国立大学島原共同研修センター

朝日高原福祉センター：社会福祉法人 朝日高原福祉センター

国民宿舎「青雲荘」：国民宿舎(ユースホステル)「青雲荘」

5. 第27回九州地区国立大学間合宿共同授業の事務日程

平成13年11月15日・九州地区国立大学教養教育実施組織代表者会議（於：佐賀大学）

11月29日・企画委員会開催通知（主管校から各大学へ）

12月17日・企画委員会（於：九州大学）

平成14年 1月 9日・平成14年度九州地区合宿共同授業の実施について(通知)

4月12日・講義題目等の推薦依頼（当番校から各大学へ）
・実施（学生募集等）、「参加学生名簿」及び「教職員滞在計画表」
提出
依頼（当番校から参加大学へ）

4月19日・講義題目等の推薦締切（参加大学から当番校へ）

5月15日・「講義要旨」及び「参考図書」の提出締切（参加大学から当番校へ）

5月31日・「参加学生名簿」及び「教職員滞在計画表」提出締め切り
（参加大学から当番校へ）

6月 上旬・参加人員の調整（当番大学）

7月 5日・学生フォーラムレポート提出締切（参加大学から当番校へ）

7月 9日・パンフレット及び学生フォーラムレポート集送付（当番校から参加大学へ）

7月10日・行程確認（当番校から参加大学へ）
1班－福岡教育大学，九州大学，九州芸術工科大学，琉球大学
2班－佐賀大学，長崎大学

8月23日～27日・合宿共同授業の実施（於：九重共同研修所）

9月 5日・報告書原稿の依頼（当番校から参加大学へ）

9月30日・報告書原稿の提出締切

平成15年 5月30日・報告書を送付（当番校から参加大学へ）

資料4 九州地区国立大学間合宿共同授業参加大学一覧（その1）

印は当番大学， 印は参加大学， 印は教職員のみ参加大学

年度	S51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
大学名	回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
九州大学																												
熊本大学																												x
琉球大学																												
佐賀大学																												
長崎大学																												
鹿児島大学																												x
大分大学																												x
宮崎大学																												x
宮崎医科大学													x	x	x	x	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
九州芸術工科大学																												
福岡教育大学							x		x	x				x			x											
九州工業大学																												x
鹿屋体育大学																												x
計	6	6	10	11	12	12	11	12	11	11	12	12	11	10	11	12	11	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	6

参考：当番大学の九州大学から鹿児島大学までの6大学の順番は、「教養部長会議」の当番大学順で編成している。
 なお、現在「教養部長会議」は「教養教育実施組織代表者会議」となっている。

九州地区国立大学間合宿共同授業参加大学一覧（その2）

印は当番大学， 印は参加大学， 印は教職員のみ参加大学

年度	S51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17					
大学名	回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30				
九州大学																																			
熊本大学																												x							
琉球大学																																			
佐賀大学																																			
長崎大学																																			
鹿児島大学																																			
大分大学																																			
宮崎大学																																			
宮崎医科大学													x			x		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
九州芸術工科大学																																			
福岡教育大学							x										x																		
九州工業大学																																			
鹿屋体育大学																																			
計	6	6	10	11	12	12	11	12	11	11	12	12	11	10	11	12	11	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	6						

参考：当番大学の九州大学から鹿児島大学までの6大学の順番は、「教養部長会議」の当番大学順で編成している。
 なお、現在「教養部長会議」は「教養教育実施組織代表者会議」となっている。